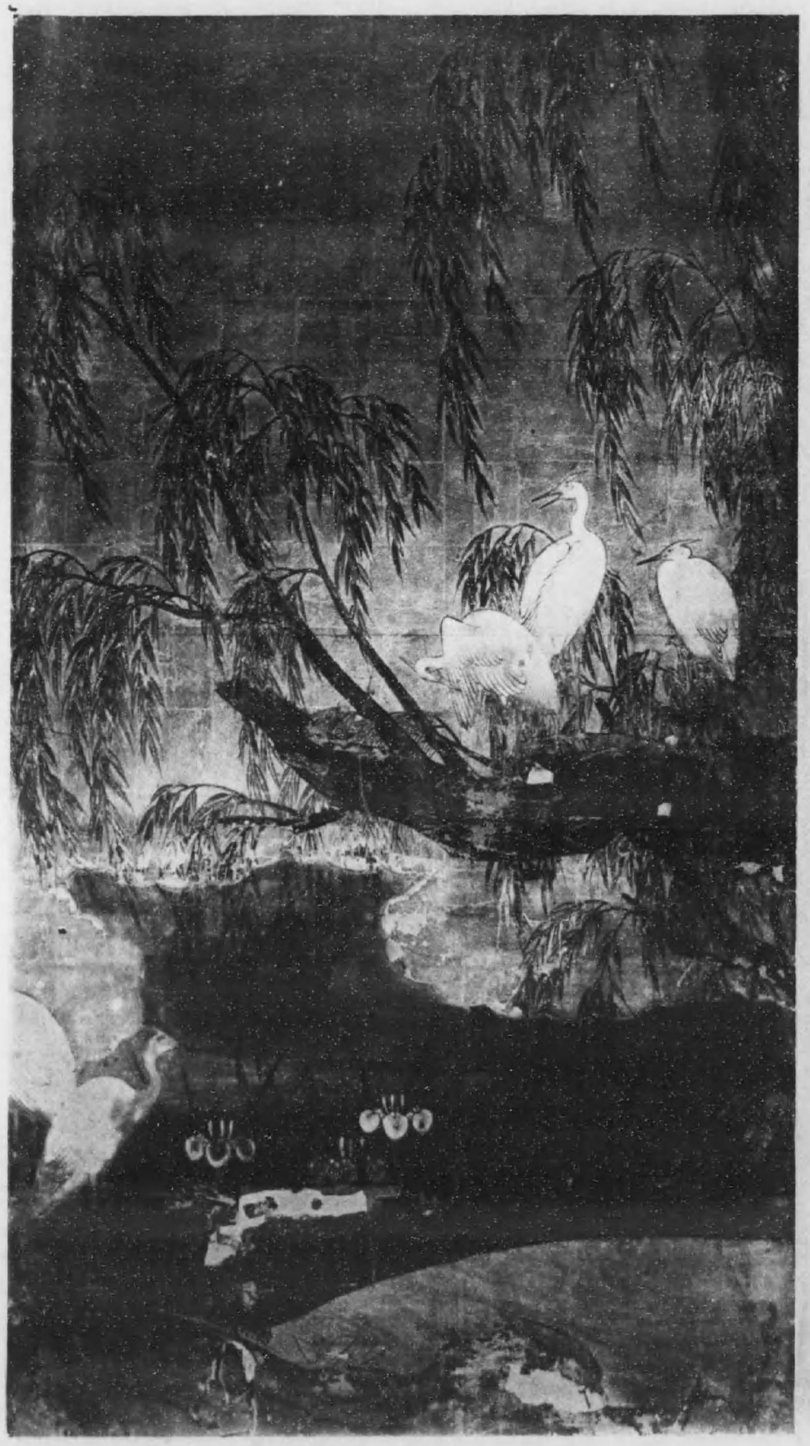
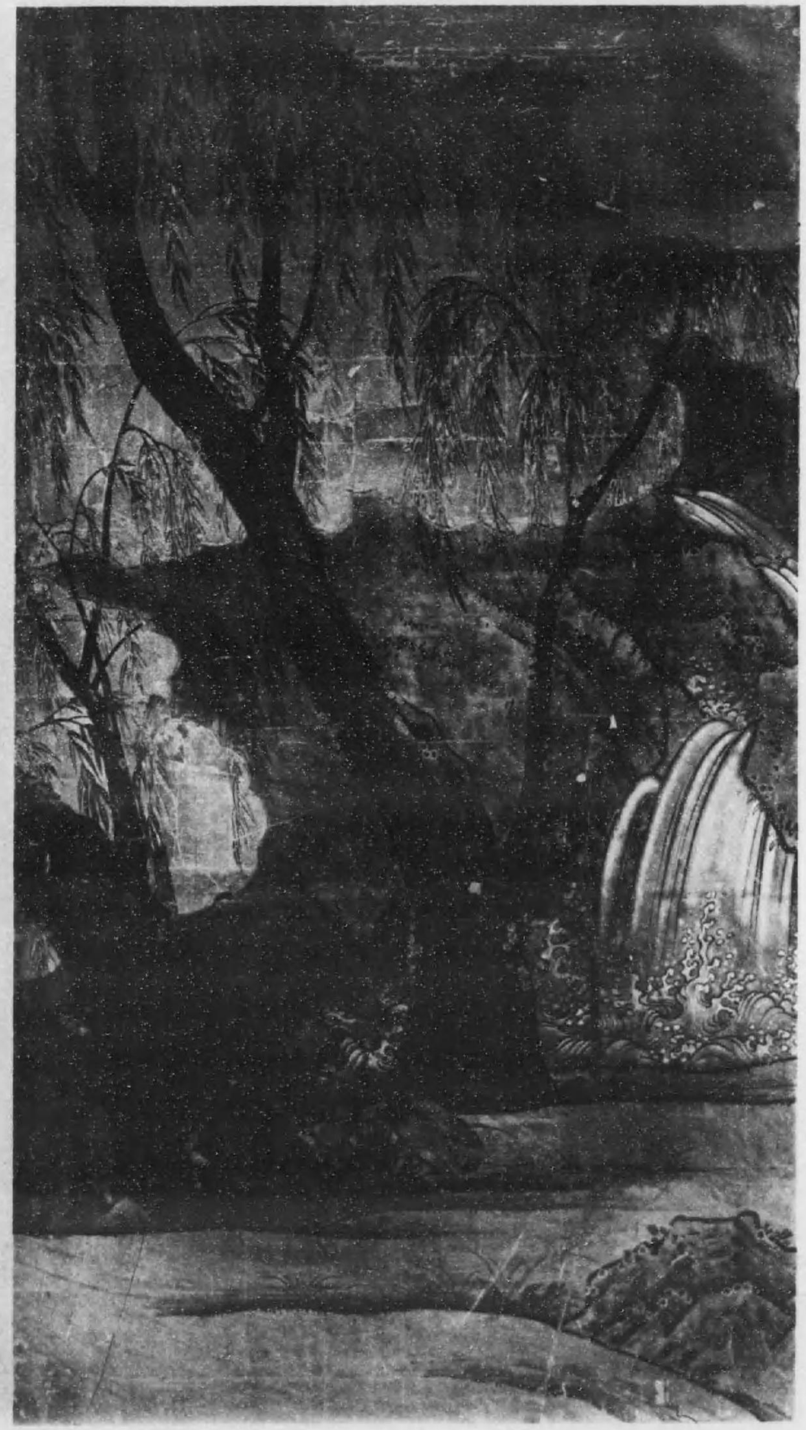
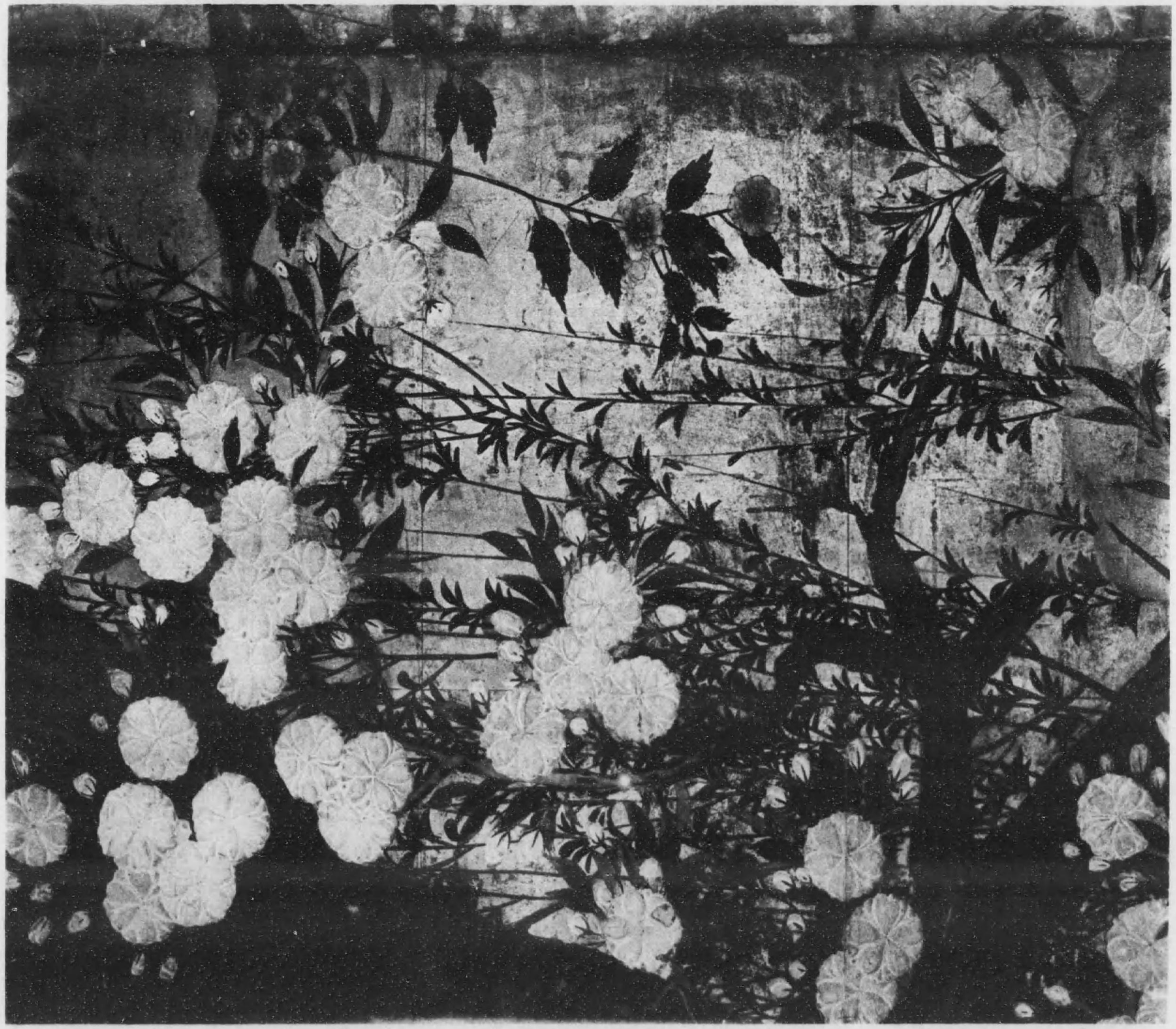
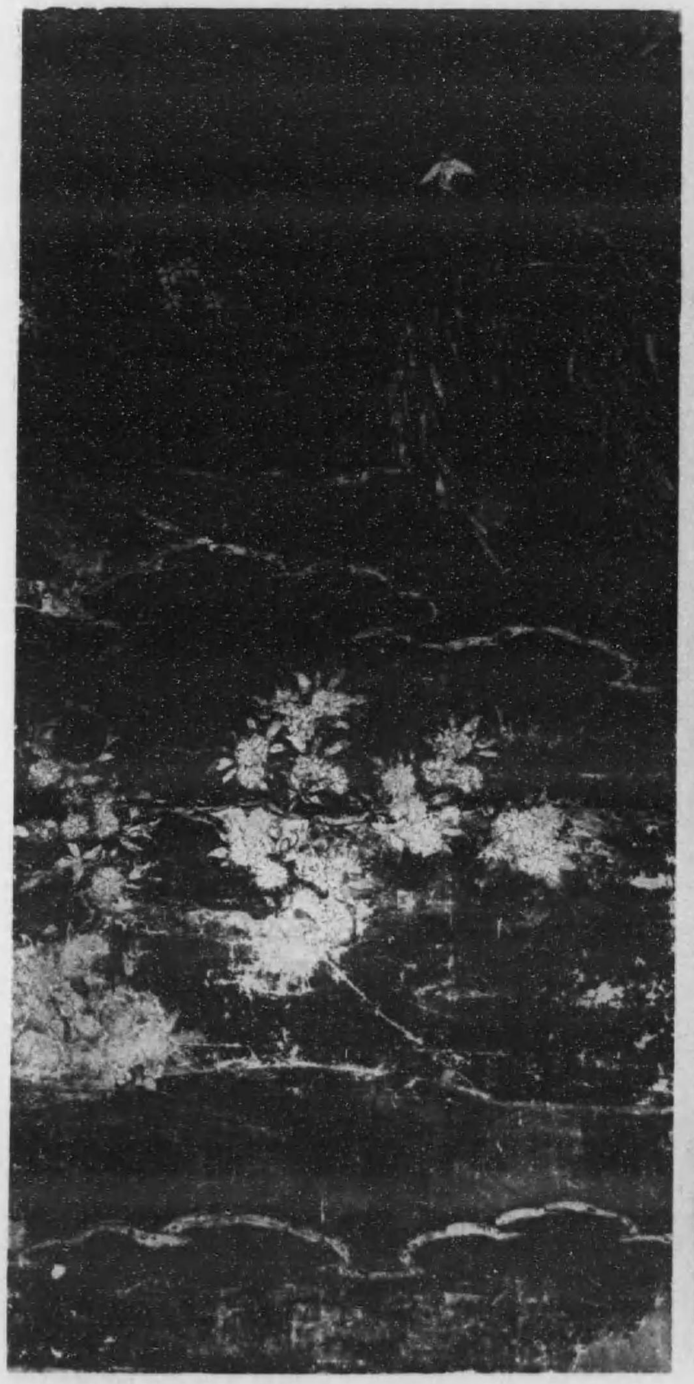
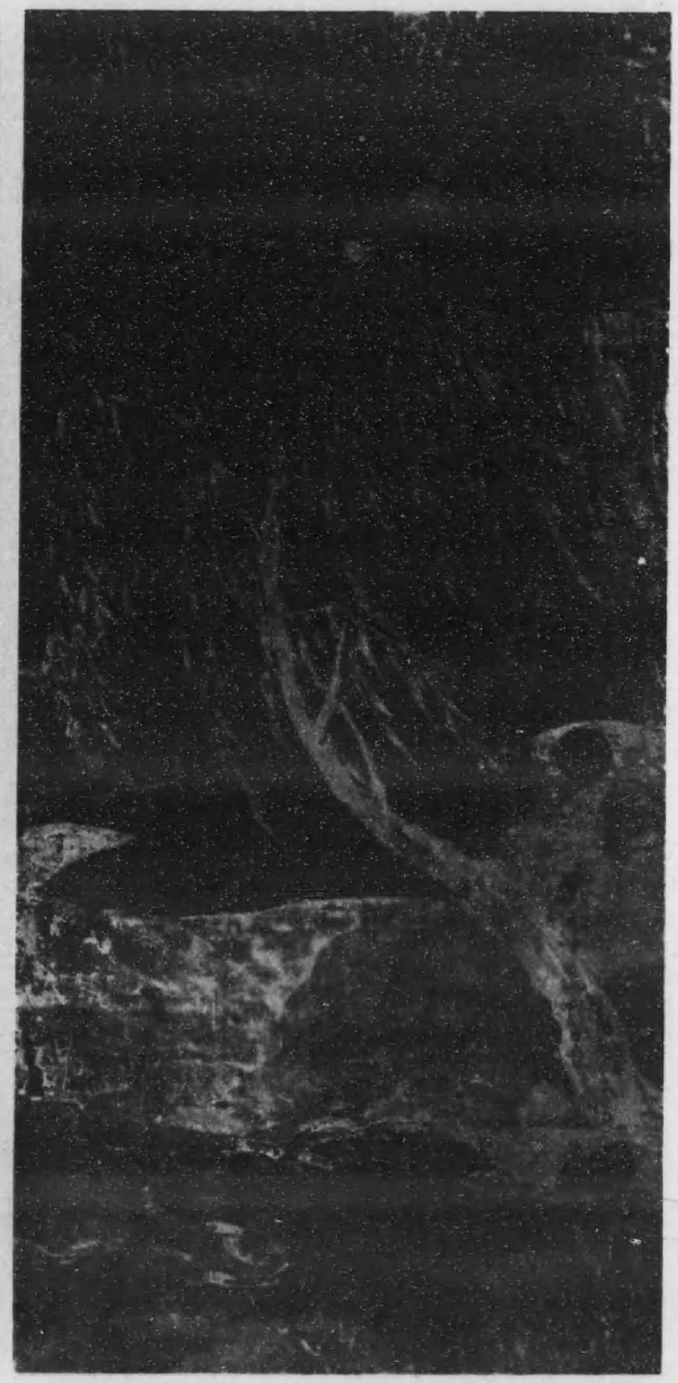
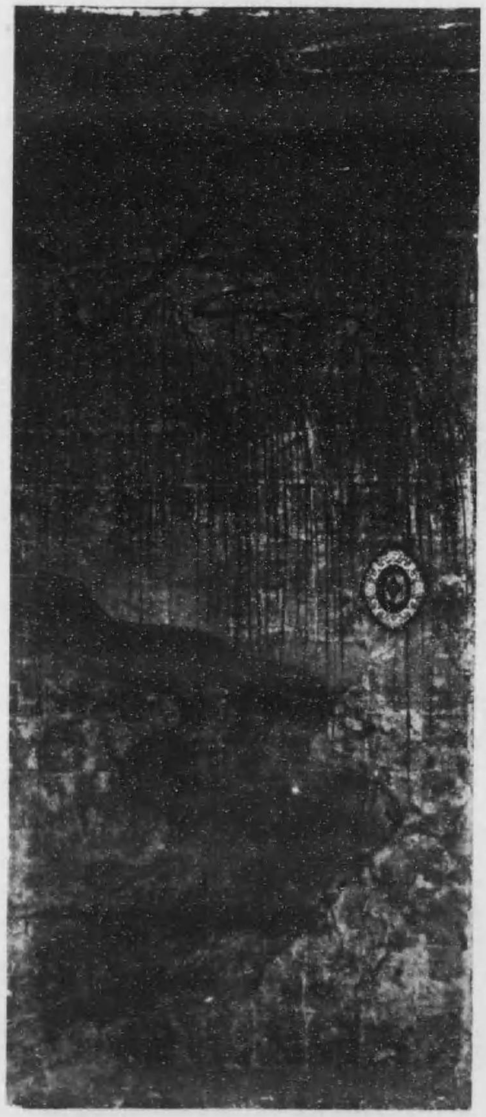


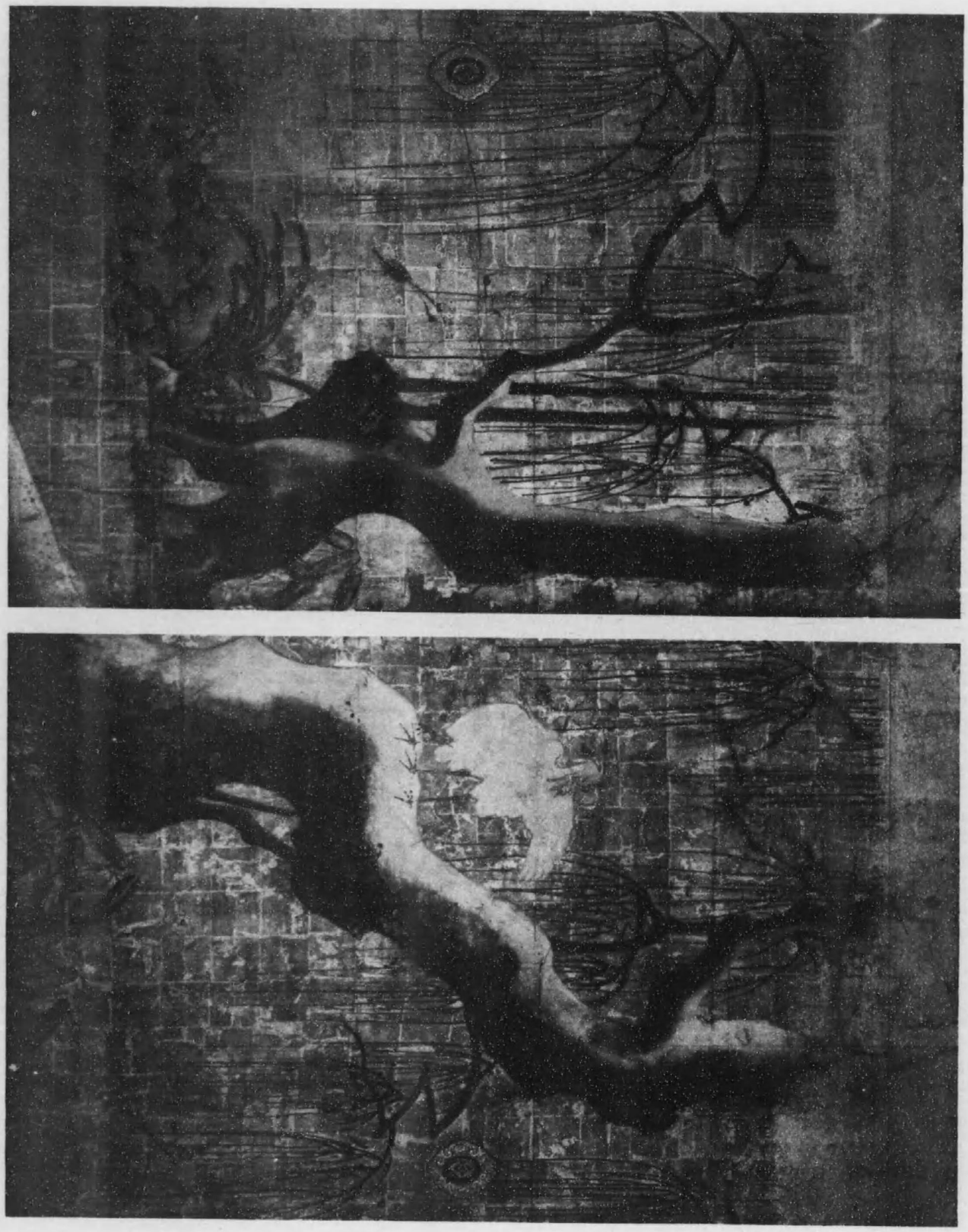


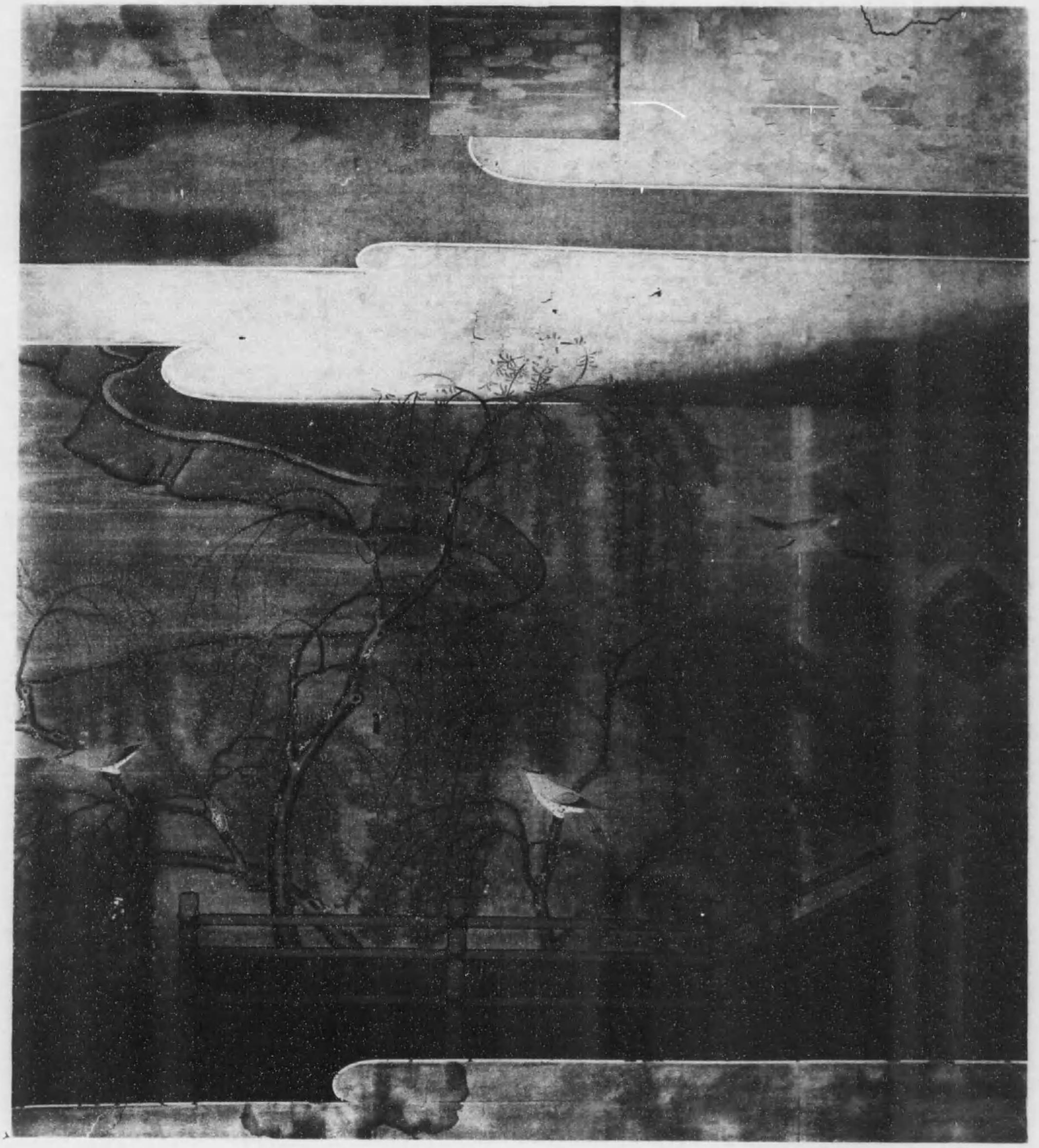












藝林畫譜『飛鳥之卷』編纂について

飛鳥の實寫は畫家にとつては可成り難事の一であります、而も先人は之を如何に取扱つたか、本集載する處作家の參考に資せむが爲めなれば主として飛鳥の姿態と表現樣式の種類とを蒐むる事に努めたのであります。

略解

1―載進の鳳凰

本圖は洛北紫野臨濟宗大本山大德寺の塔頭龍光院所藏の載文進筆絹本着色鳳凰圖で今は京都帝室博物館に出陳されてあります。載進字名は文進靜庵又は玉泉山人と號し寶德年間院中第一と稱せられた明人であります。

2―山樂の飛禽

本圖は洛西嵯峨眞言宗大本山大覺寺宸殿牡丹之間の部分であります、元來が牡丹中心の襖繪でありますから遠く高く飛ぶ小禽は頗る簡素な表現でありますが作者自身の豊かな心持ちが出て居りますので特に掲載しました、山樂の略傳は前集と重複しますから略します。

4―山雪の水禽

兩圖共は第一集波の卷に波として掲載した、京都市三條通東洞院西入細辻源兵衛氏所藏の六曲屏風山雪筆雪月水禽圖の他の部分で、波の卷と重複の感がありますが水禽の群をなす處實に捨て難い爲に特に掲載しました。

5―沈金彫の鳳凰

本圖は京都府下乙訓郡大山崎村眞言宗寶積寺（寶寺）秘藏の紺紙金泥の法華經々箱に施こせる沈金彫の鳳凰で、此れは大江定基の寄進したものでありますが作者は未詳ですが多分朝鮮系かと思はれます。

6―泉石の鳴鶴

本圖は京都市今出川臨濟宗相國寺の秘藏で京都帝室博物館に寄托中の國寶絹本着色雙鶴の一であります、泉石は明人にて文正と云ひ泉石は其號であります。

7―雪舟其他の飛禽

本圖中、右は京都古義眞言の本山智積院藏雪舟筆と傳へる六曲小屏風中の一部であります。畫僧雪舟名は芳揚、備後齋と號し備中赤濱の産で明國に遊び周防山口雪谷庵に居住し永正三年に入寂しました。

左圖上は紀州高野山塔頭寶寿院所藏の六曲屏風の部分で曾我直庵の筆であります。直庵は紹祥の男にて山水人物花卉鳥獸を善くし畫を描くに妙を得て居りました。

左圖下は山城黃檗山萬福寺所藏六曲屏風の半双にて山樂と評判されて居る桃山時代のものであります。

8―彫刻の飛鳥

本圖は洛南岩清水八幡宮社殿及廻廊欄間の極彩色彫刻であります、作者及年代も明らかではありませぬが兎も角も德川初期に於ける代表的な彫刻でありますが、併し同社は從來絶對に寫眞を禁じて居た爲めかゝる名作も紹介された事がありませぬ。

9―光琳の小禽

洛西嵯峨眞言宗大本山大覺寺正殿殿障子腰板には尾形光琳が半面に兎の圖、他の半面は花鳥の圖を描いて居ます、本圖は即ち其花鳥圖十点の内二点であります、從來他の部分は往々發表されて居るので特に餘り紹介されて居ない分を掲載しました。

10、11―岸駒の孔雀

本圖は京都市六角烏丸西入荒川宗助氏愛藏の六曲屏風岸駒筆孔雀の圖にて同人作品中最も優秀なるものである、此圖始め相國寺（或は建仁寺）の爲に描き其後京都御所へ獻納となり、更に本願寺へ下附となれるものを先年荒川家へ轉藏されたりと傳へられて居る、岸駒性は佐伯氏岸駒は其の名、天開寫、虎頭館其他數號がある、始め越中富山侯に仕へ後京都に住まり有栖川宮に仕へて雅樂助となつた、後宮人となり越前守となる、始め沈南蘋の畫風を慕ひ後ち各派を折衷して一家をなし、水墨の虎は世に定評がある、晩年洛北岩倉に小庵を結び天保九年九十歳を以て逝つた。

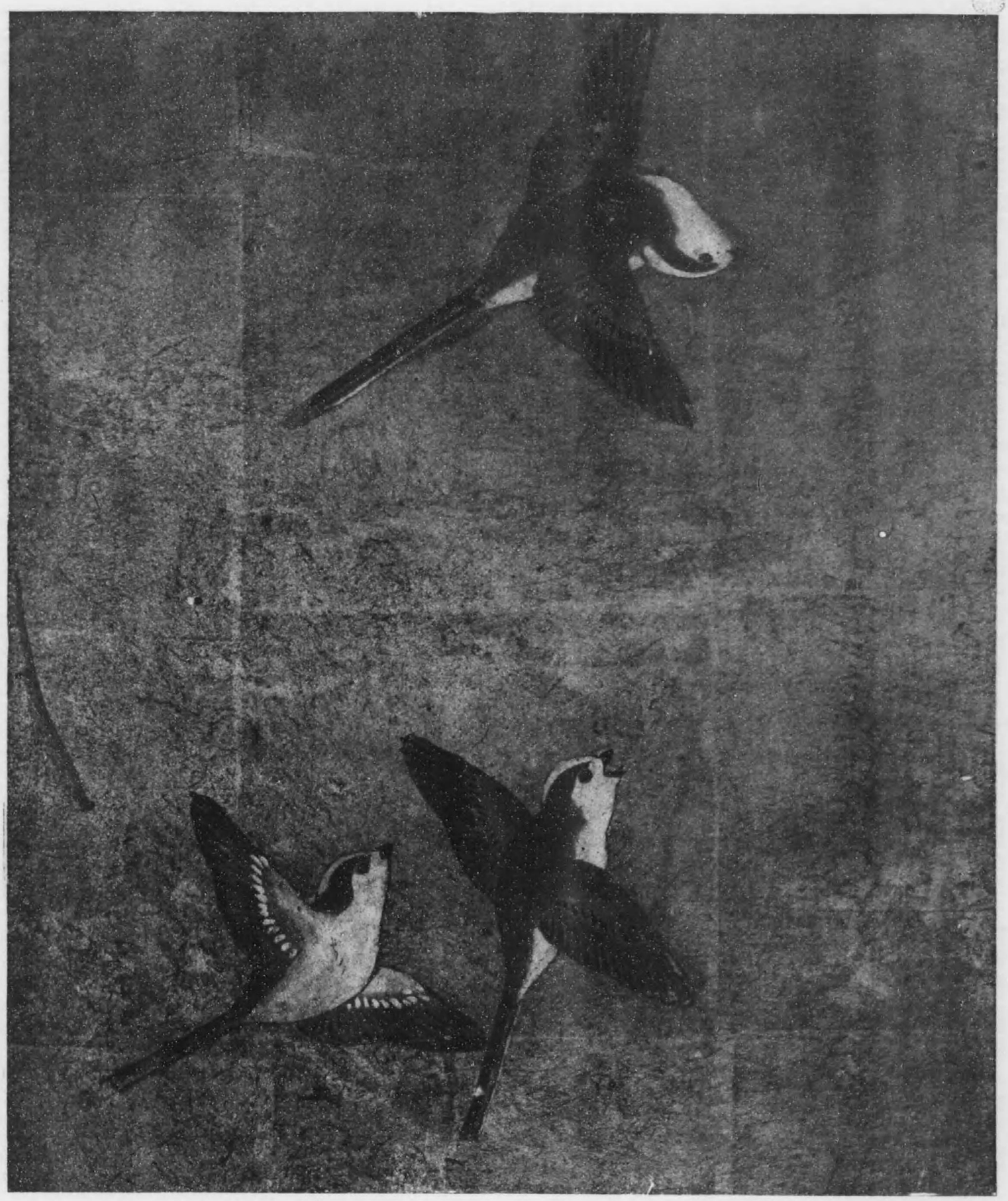
12―直賢の落雁

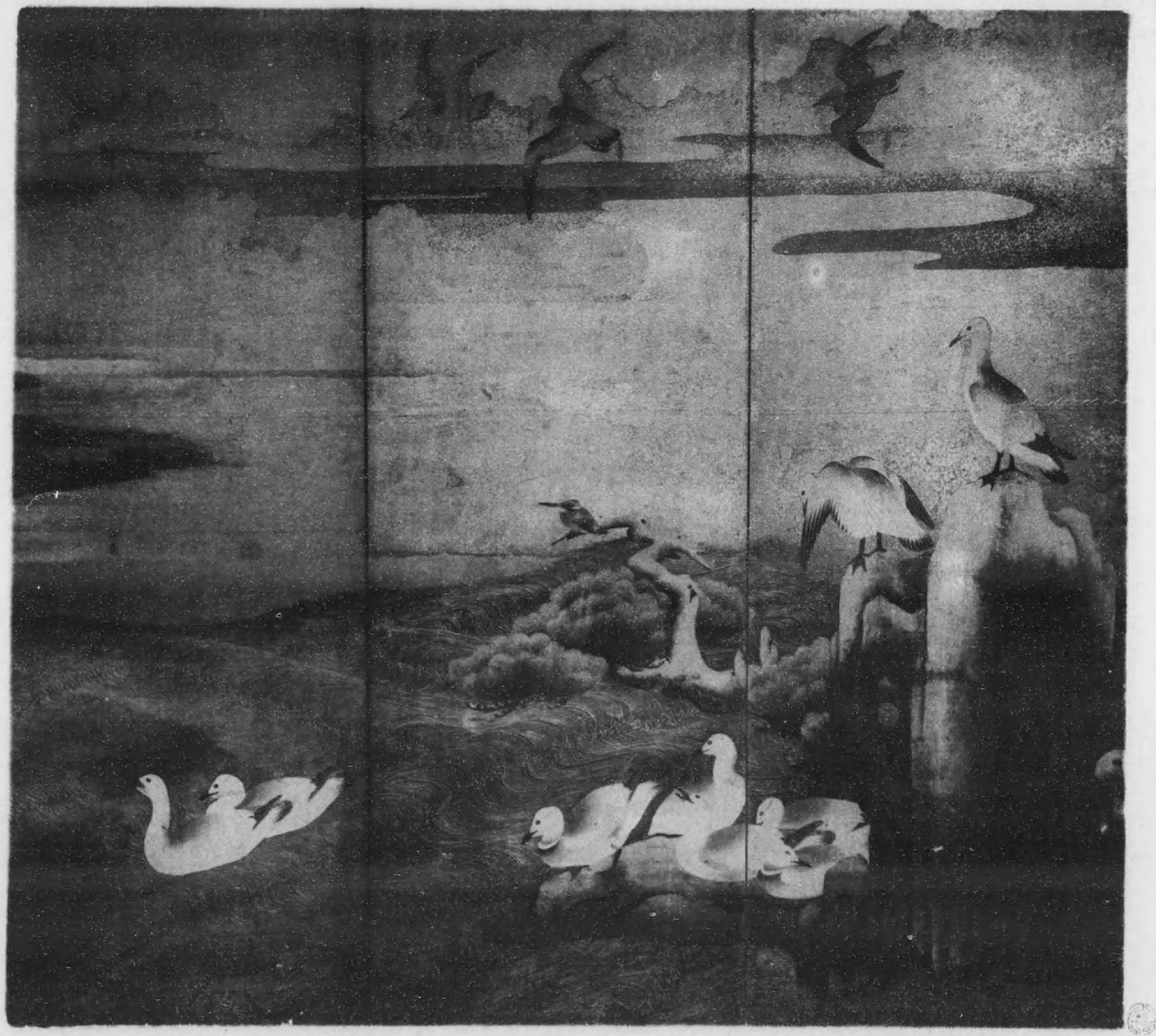
本圖は京都北野神社の所藏の紙本着色八曲屏風の半双で白井直賢筆雪中蘆雁の圖であります、他の半双は草花小禽の圖で共に京都帝室博物館に寄托されて居ます。直賢字は士齊、通稱は忠一郎、文藝と號し圓山應擧に師事し遂に應擧門下十哲の一人さまでなりました、文化頃の畫人であります。

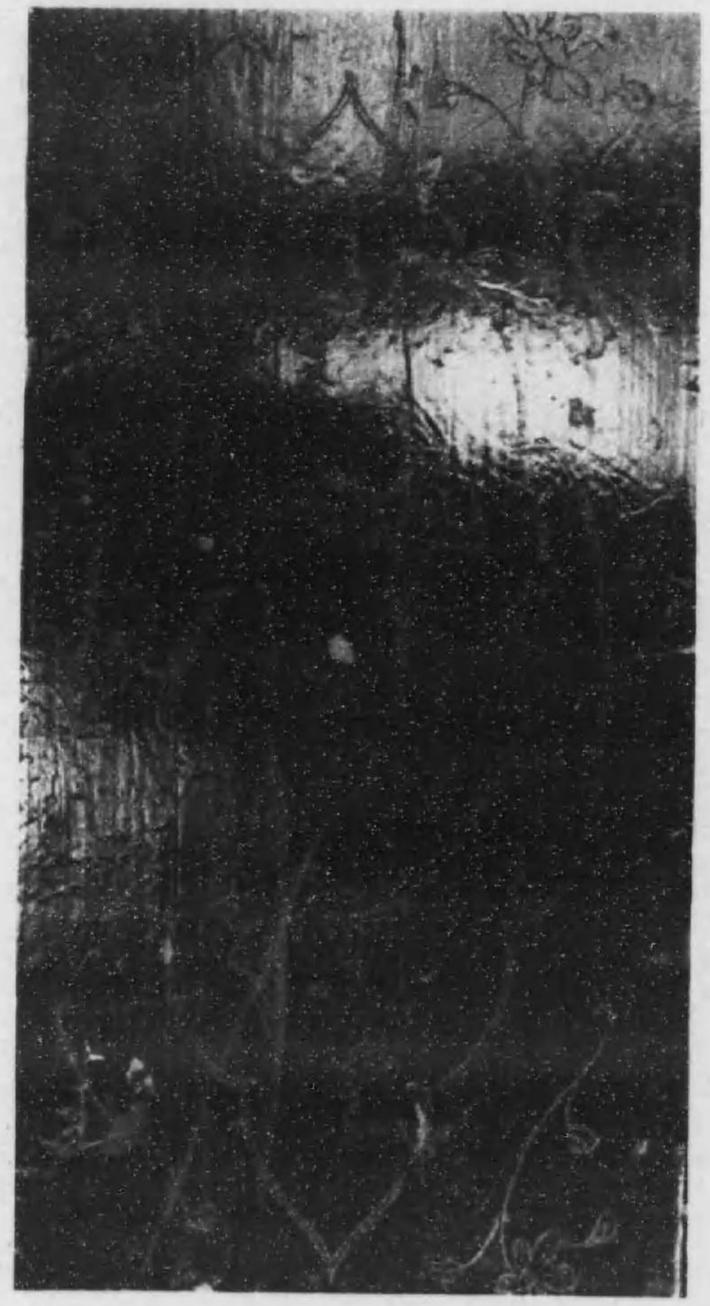
13―土佐派の飛鶉

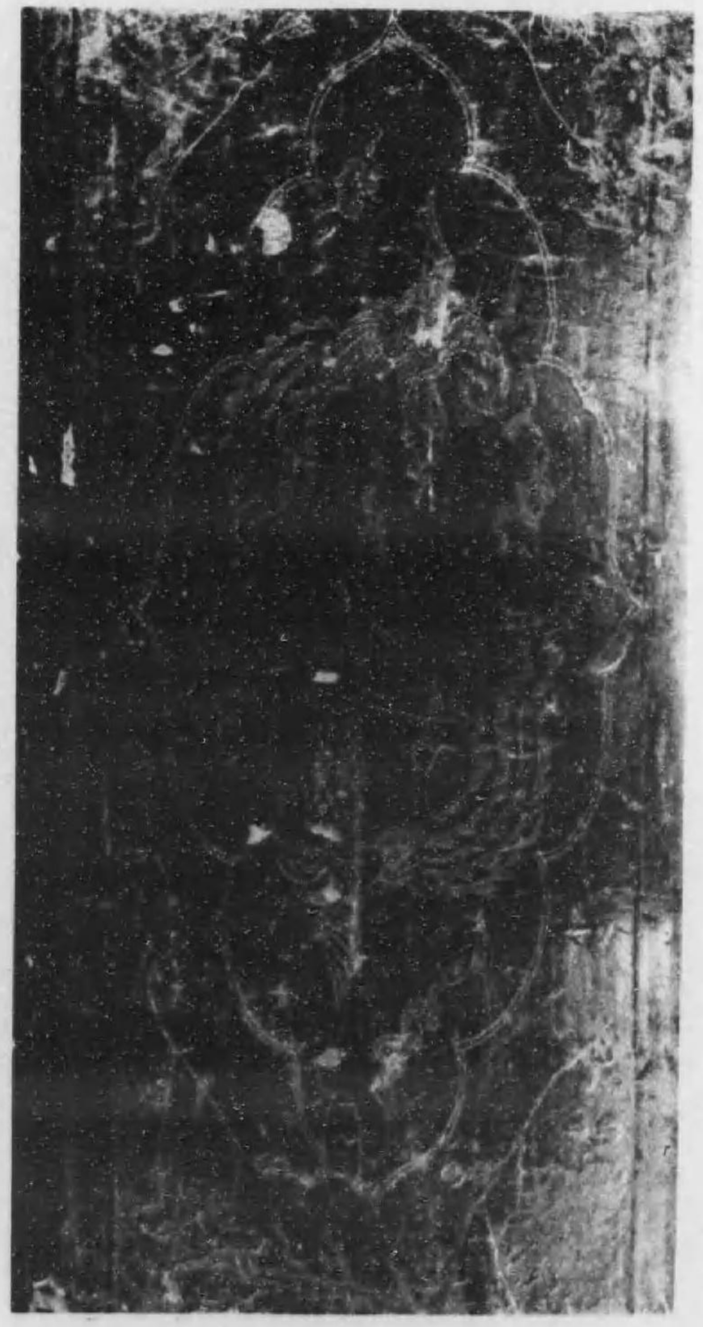
本圖は京都粟田天台宗青蓮院門跡の障子腰張りの一であります、土佐派のものでありますが何人の作か未詳であります。

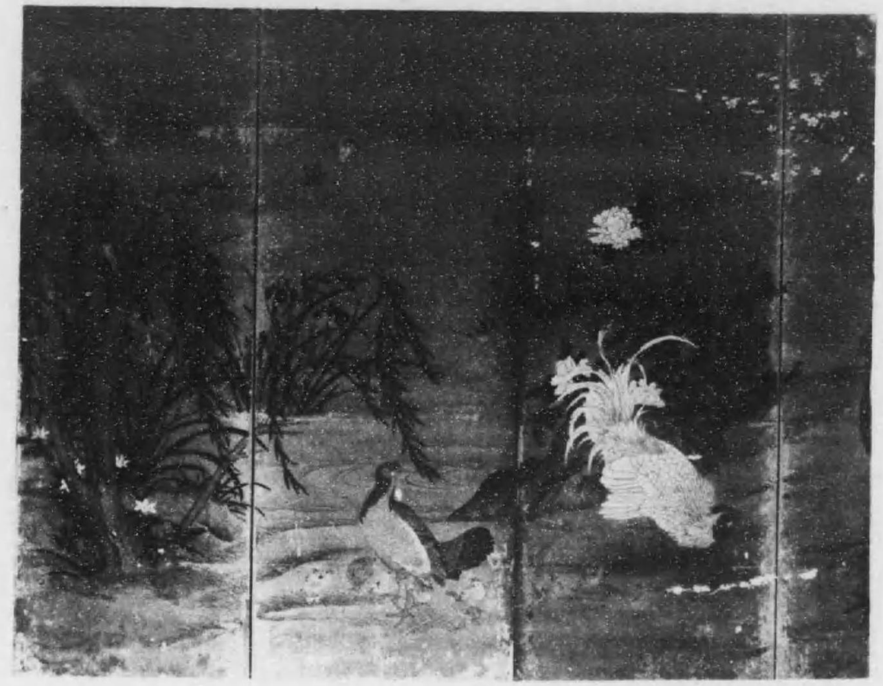
1

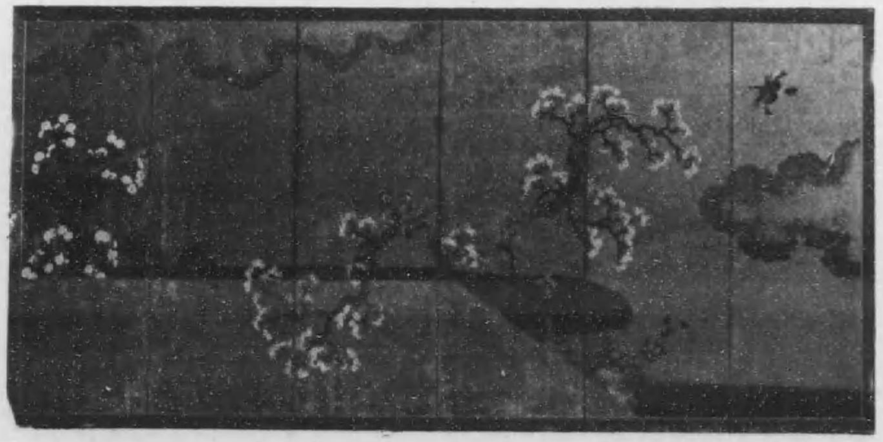


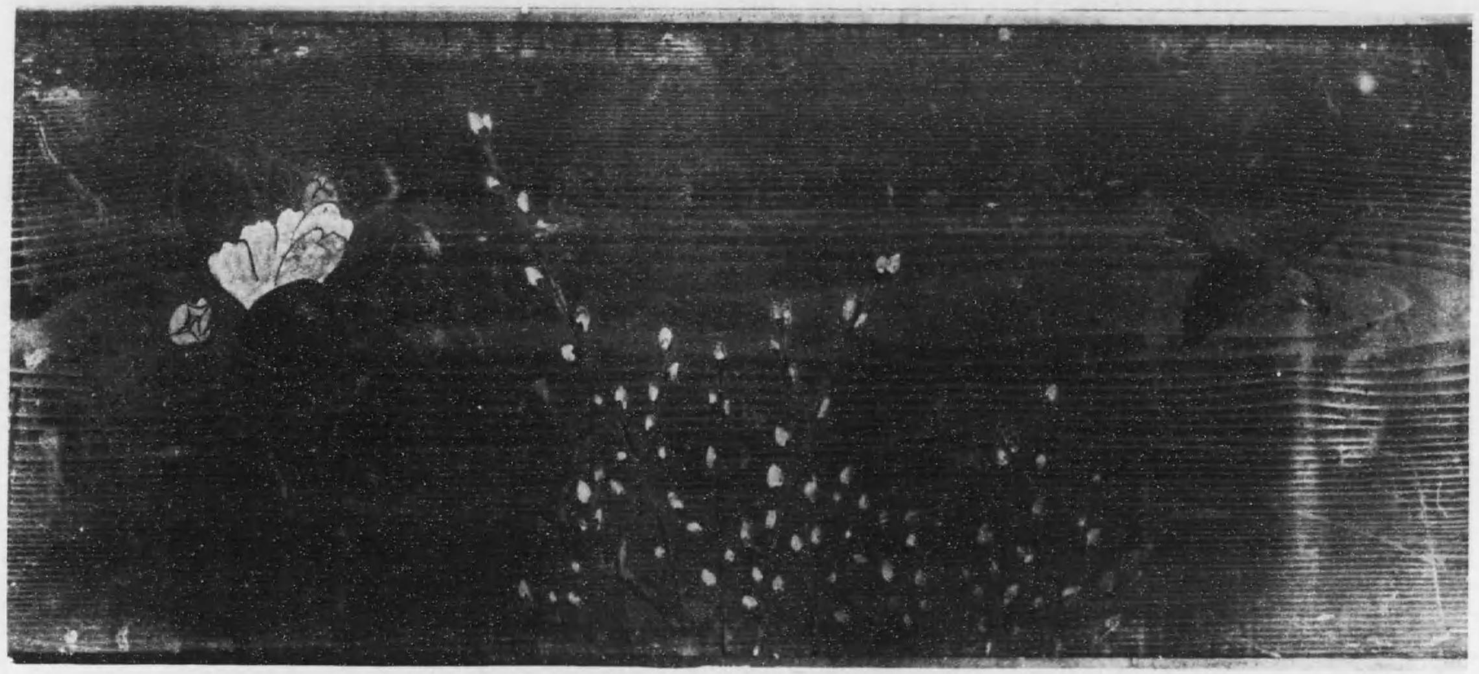


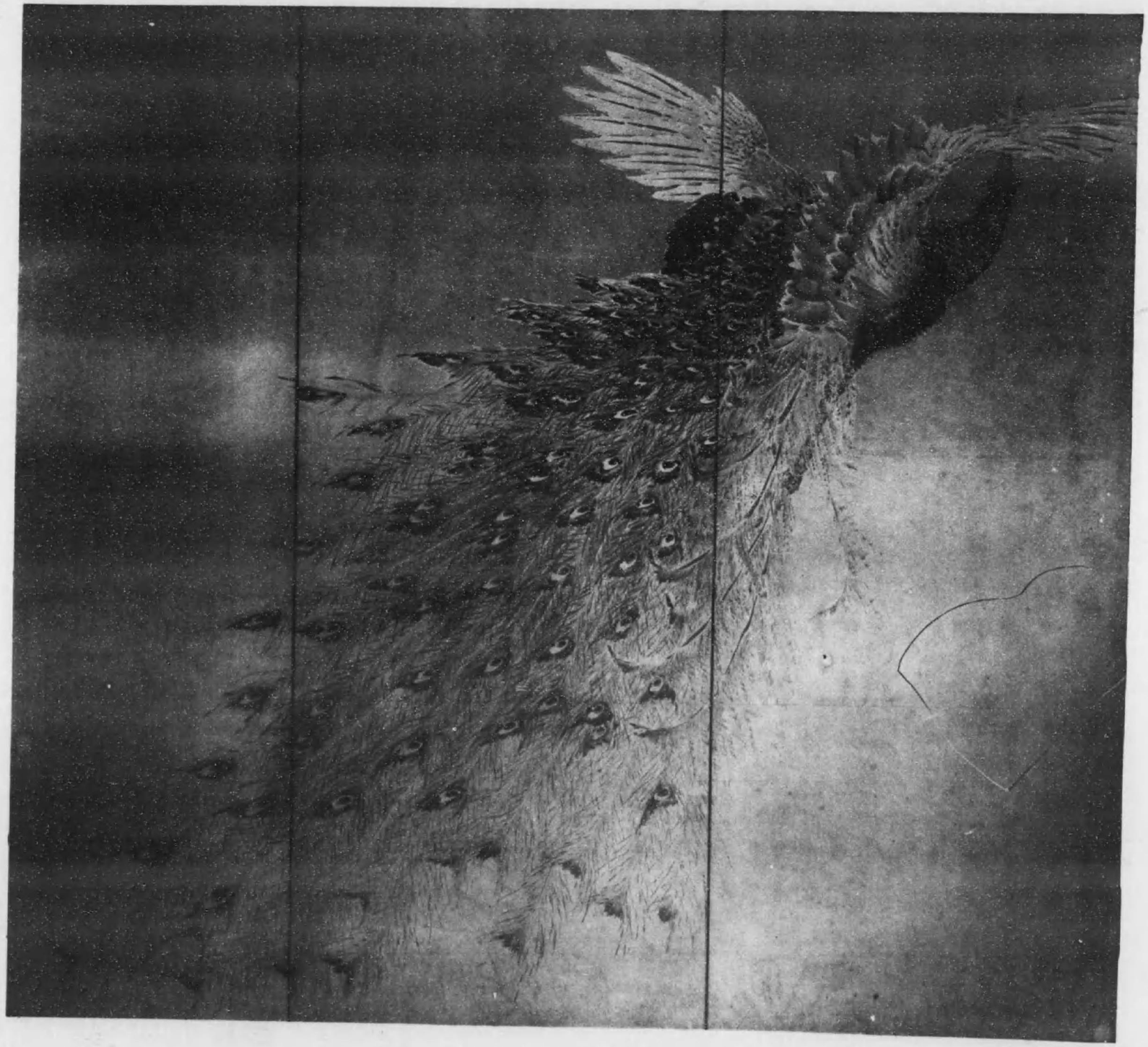


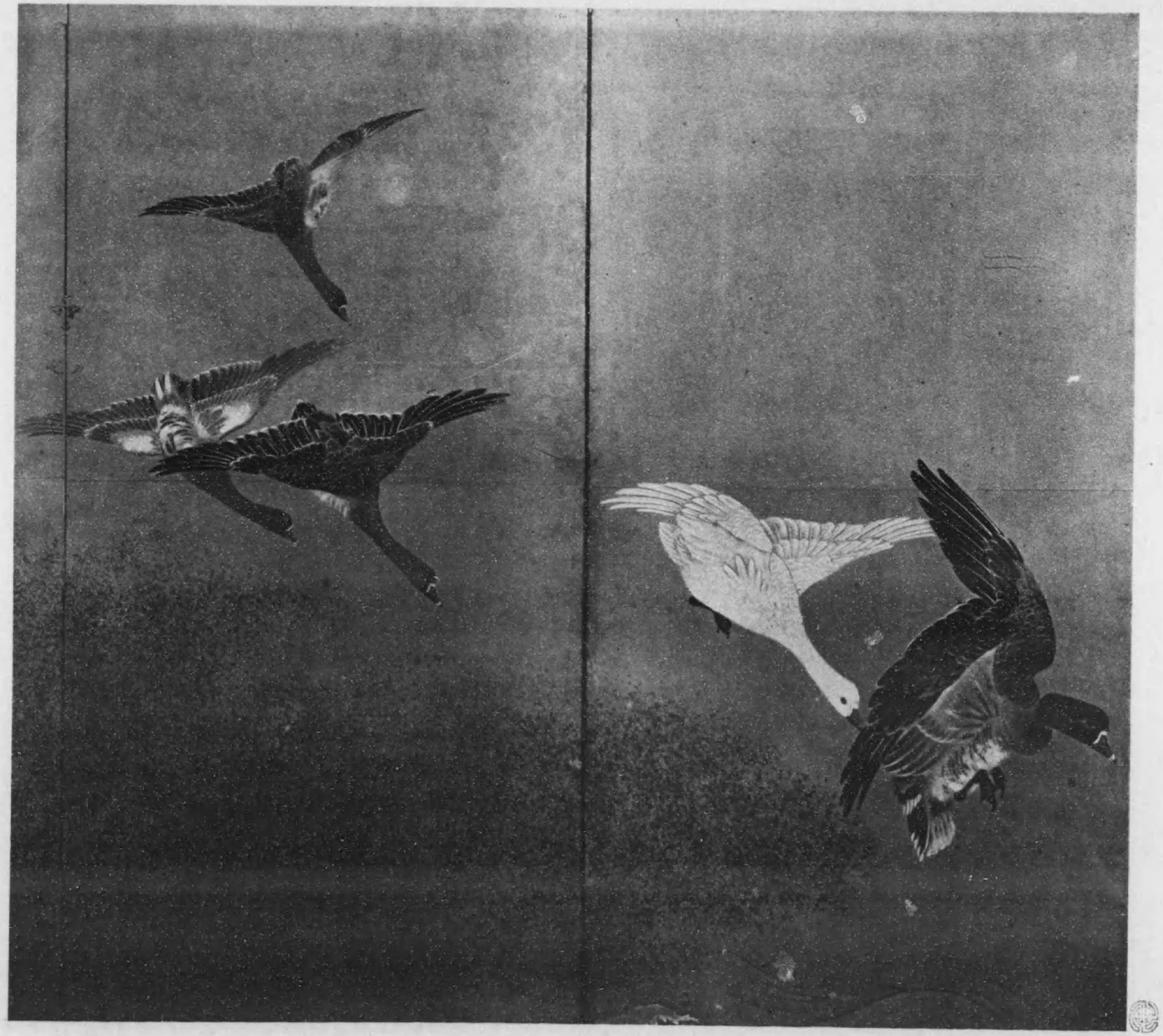


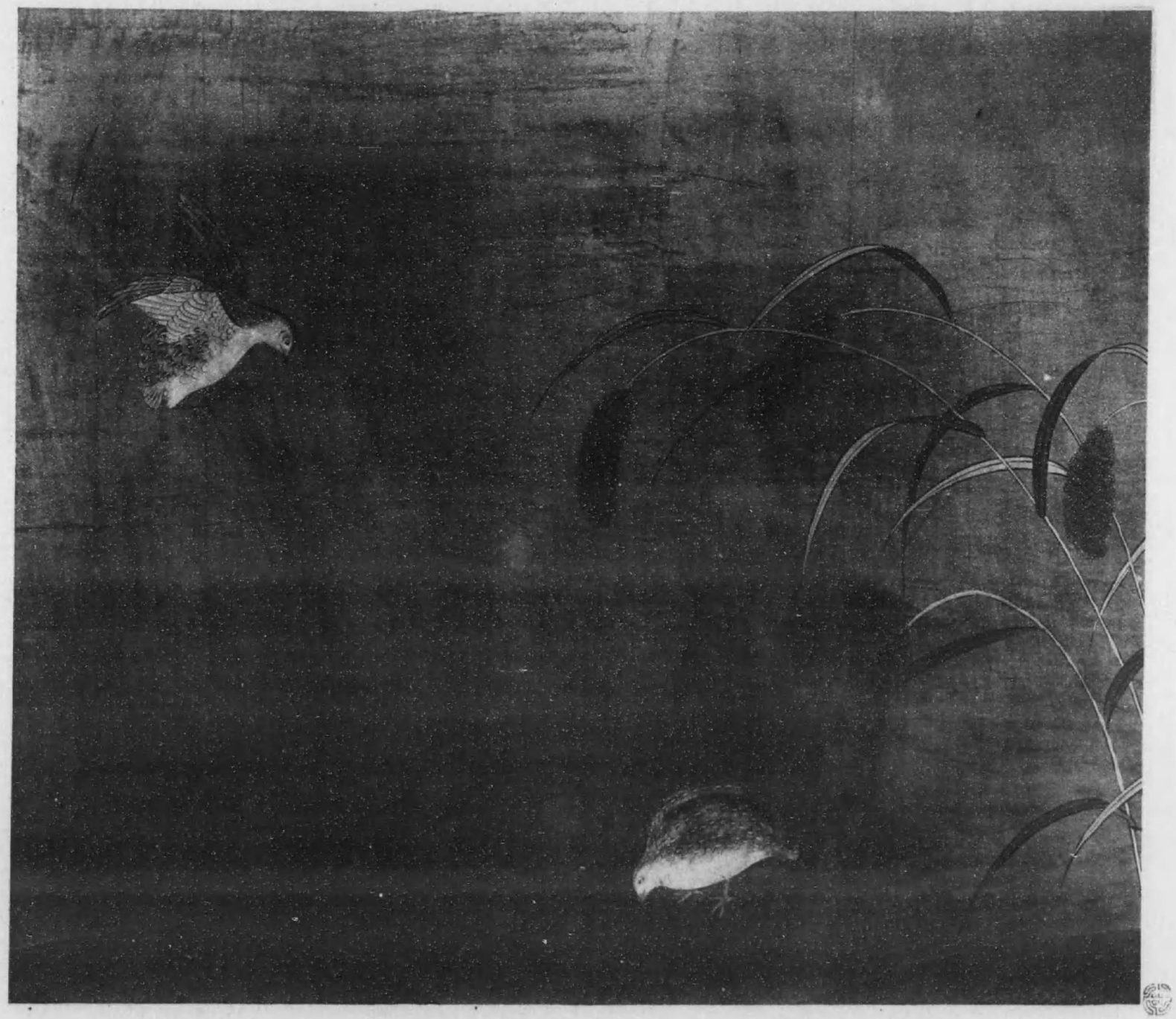


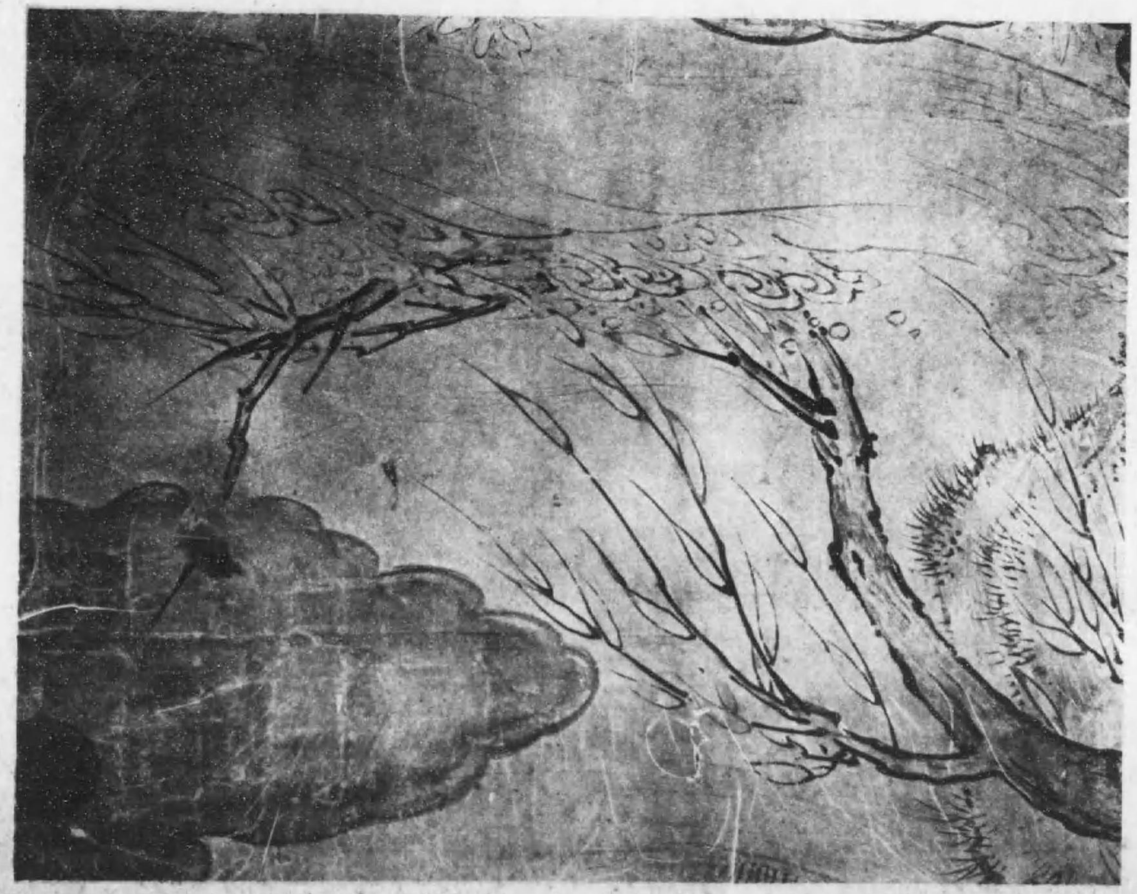


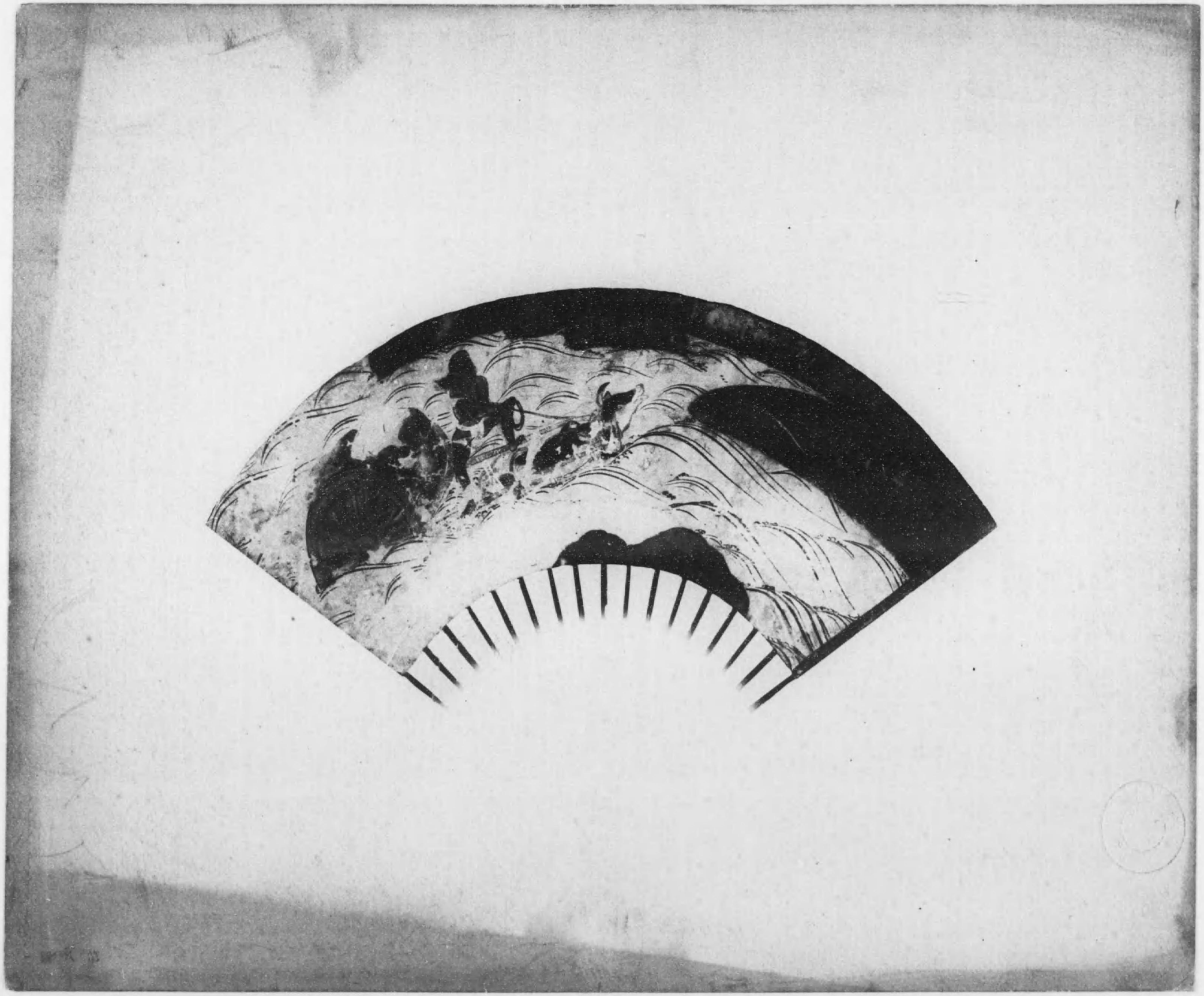




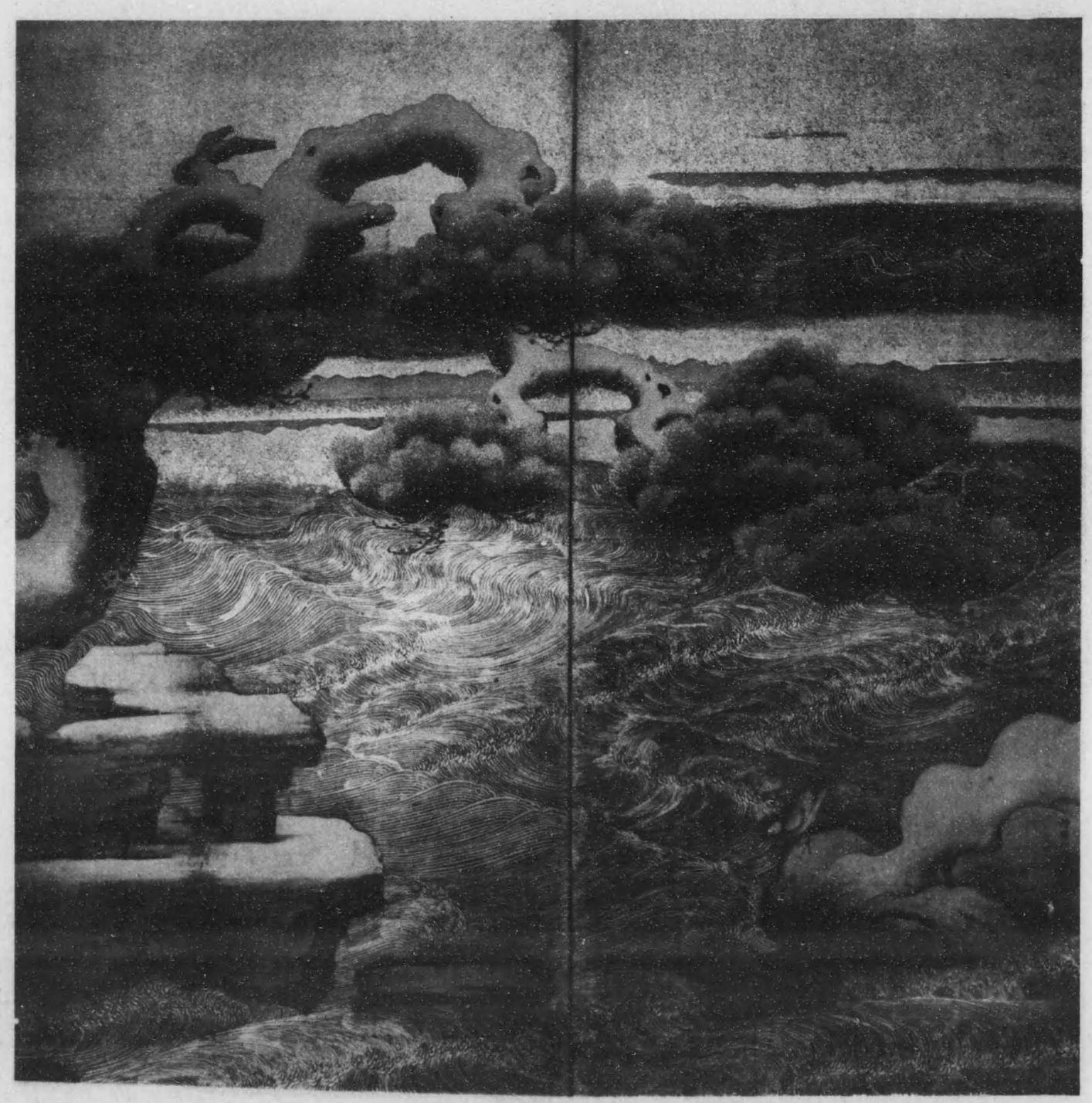




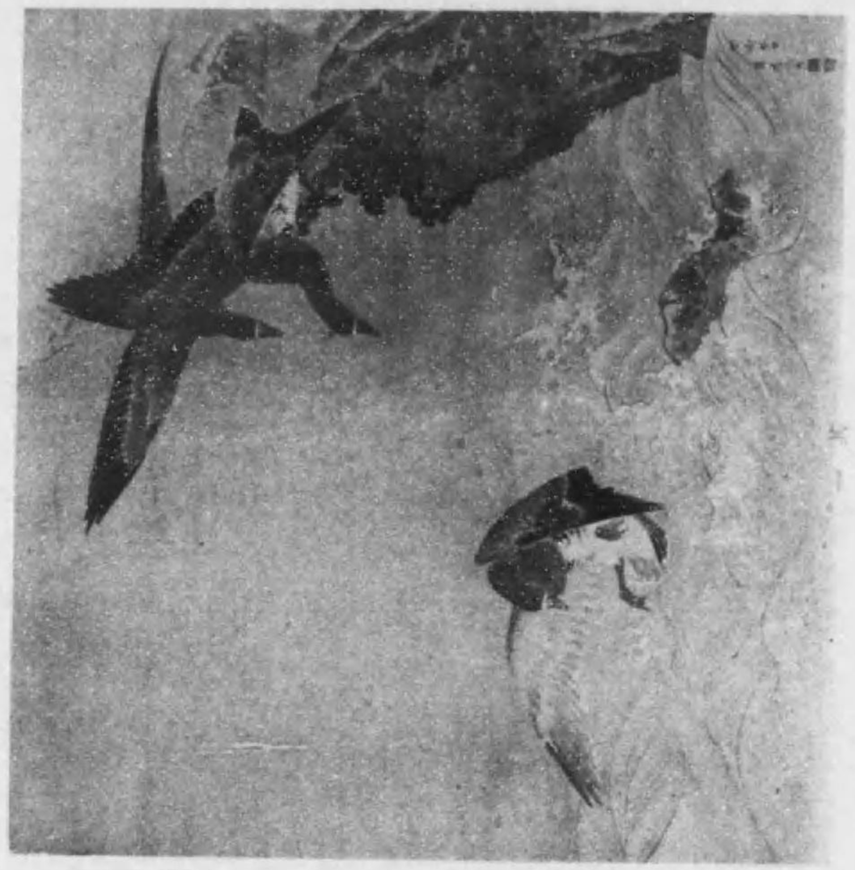


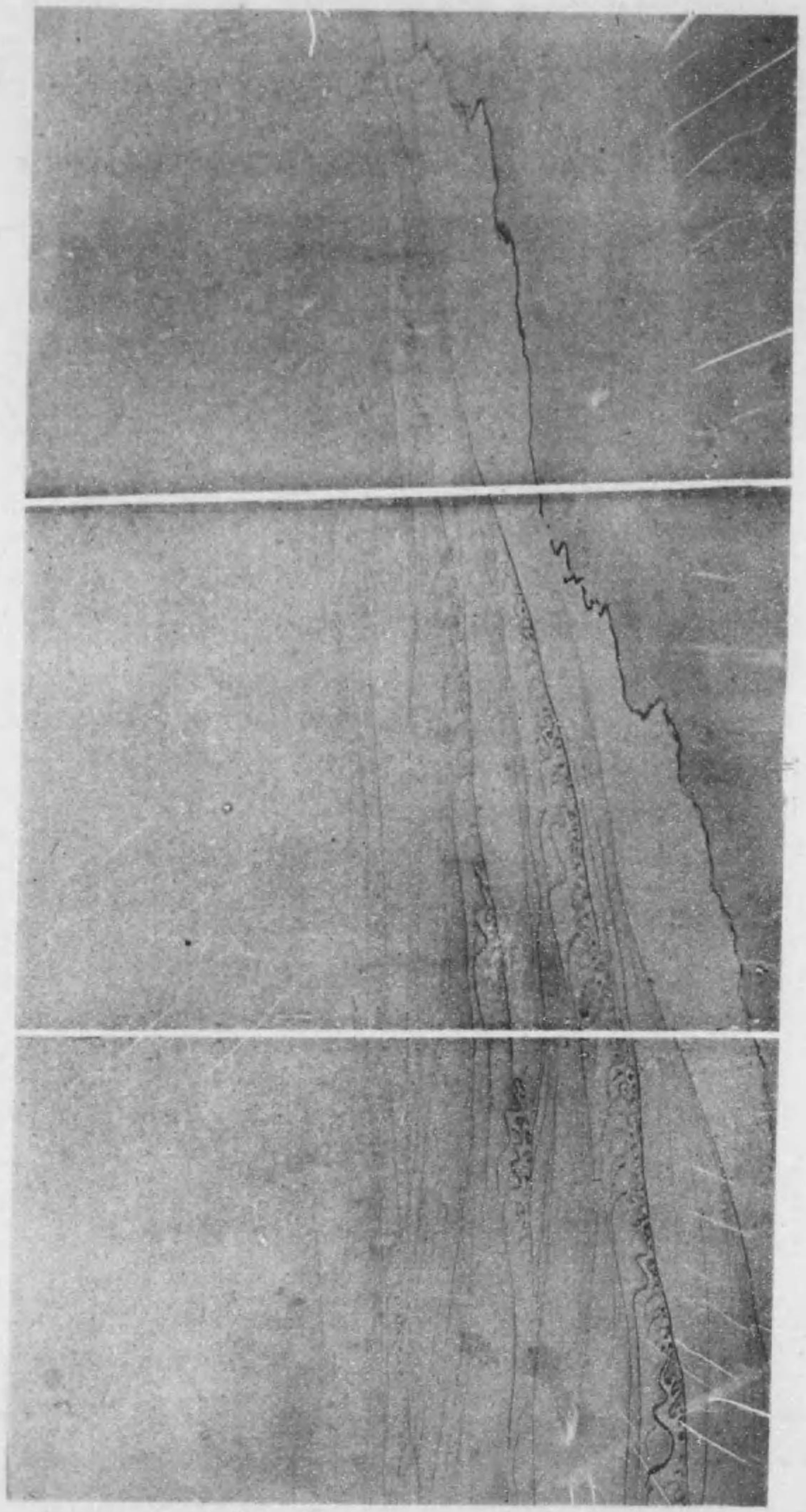


第九圖



圖壹拾貳





圖版拾貳

藝林書譜第十三集紅葉之卷編纂について

金風玉露の秋が來て滿山、錦を飾る頃も間近い時となりました、春の櫻が日本の誇りであるよふに秋の紅葉も亦我國獨特のものであります、隨つて紅葉を取り扱つた名畫は尠くありませぬ、本集は多數の紅葉圖の中から構圖に着色に成るべく變化に富んだものを撰んだのであります。

大正十一年九月

編者じるす

本集編纂期に於て責任者は病褥にあり、一方院内に工場新設工事の最中にて繪畫の撰定撮影も遺憾な点尠なからざるも次集よりは懸命の努力を以て愛覽者各位の期待を空しくせぬ覺悟であります。

紅葉之卷内容目次及略解

第一圖＝蒔繪の紅葉

本圖は京都花屋町島原口本圓寺藏京都博物館出陳中の金高蒔繪行厨を撮影したもので藤原前後のものと鑑せられます。

第二圖＝光起の紅葉

本圖は江州石山寺の靈寶にて京都帝室博物館に出陳中の石山寺緣起繪卷（七卷もの）第四卷の部分であります、筆者は土佐光起であります。（光起傳上編第四集松之卷參照）

第三圖＝山樂の紅葉

本圖は京都新義眞言宗本山智積院の障壁畫（國寶）の部分で狩野山樂の筆であります。（山樂傳上編第二集菊之卷參照）

第四圖＝傳宗達の紅葉

本圖は洛東妙法院藏屏面貼交六曲屏風の中、紅葉之圖で野々村宗達の筆と傳ふるものであります。（宗達傳上編第一集波之卷參照）

第五圖＝圓伊の紅葉

本圖は京都東山五條上ル時宗歡喜光寺秘藏、京都博物館出陳中の國寶絹本着色一遍上人繪卷（十二卷）の部分で土佐圓伊の筆と傳へられて居ります。筆者圓伊は畫を以て法眼に叙せられました。正安年間の人であります。

第六圖＝傳光信の紅葉
第七圖＝仝

前圖は京都花屋町島原口本圓寺藏の紙本着色六曲屏風大原御幸の一部、後圖は同じく紅葉狩の一部であります。筆者光信は土佐宗家の畫人、光長光起と共に土佐三筆と稱せられる人で、畫所頭となり、從四位下刑部大輔に進みました。畫く所繪卷物多く元信と共に當時名聲嘖々たるものがありました。大永五年五月廿日歿しました。

第八圖＝雪溪の紅葉

本圖は京都府下山科醍醐三寶院所藏紙本絹彩色六曲屏風の紅葉の部分であります。筆者雪溪姓は山口、梅庵と號しました。平安の人雪舟及牧溪を學んで自ら雪溪と號し晩年一格をなしました。畫く所味ひ惇厚にして花禽も亦頗る雪舟の風致を得て居りました。本圖の如きも雪溪の風格を偲ぶに足る傑作であります。京保年中の人であります。

第九圖＝吉光の紅葉

本圖は洛東淨土宗總本山知恩院所藏にて現に京都博物館に出陳中の國寶紙本着色法然上人繪傳（勅修御傳といふ）四十八卷中第八卷の大師現放光攝逸の相圖の部分であります。筆者吉光は土佐宗家の畫人で。藤原經隆の三男、佛畫を善くし、又雜畫に巧みで、宗家を繼ぎました。繪所頭となり累進して從四位下刑部大輔に至りました。正安頃の人であります。

第十圖＝光琳の紅葉

本圖は洛北淨土宗百萬遍知恩寺秘藏の光琳筆花鳥十二ケ月繪卷の一部であります。（光琳傳上編第二集菊之卷參照）

第十一圖＝光琳の紅葉

本圖は京都市新町通椹木町角神阪雪佳氏秘藏の光琳肉筆扇面畫帖卷頭紅葉の圖であります。

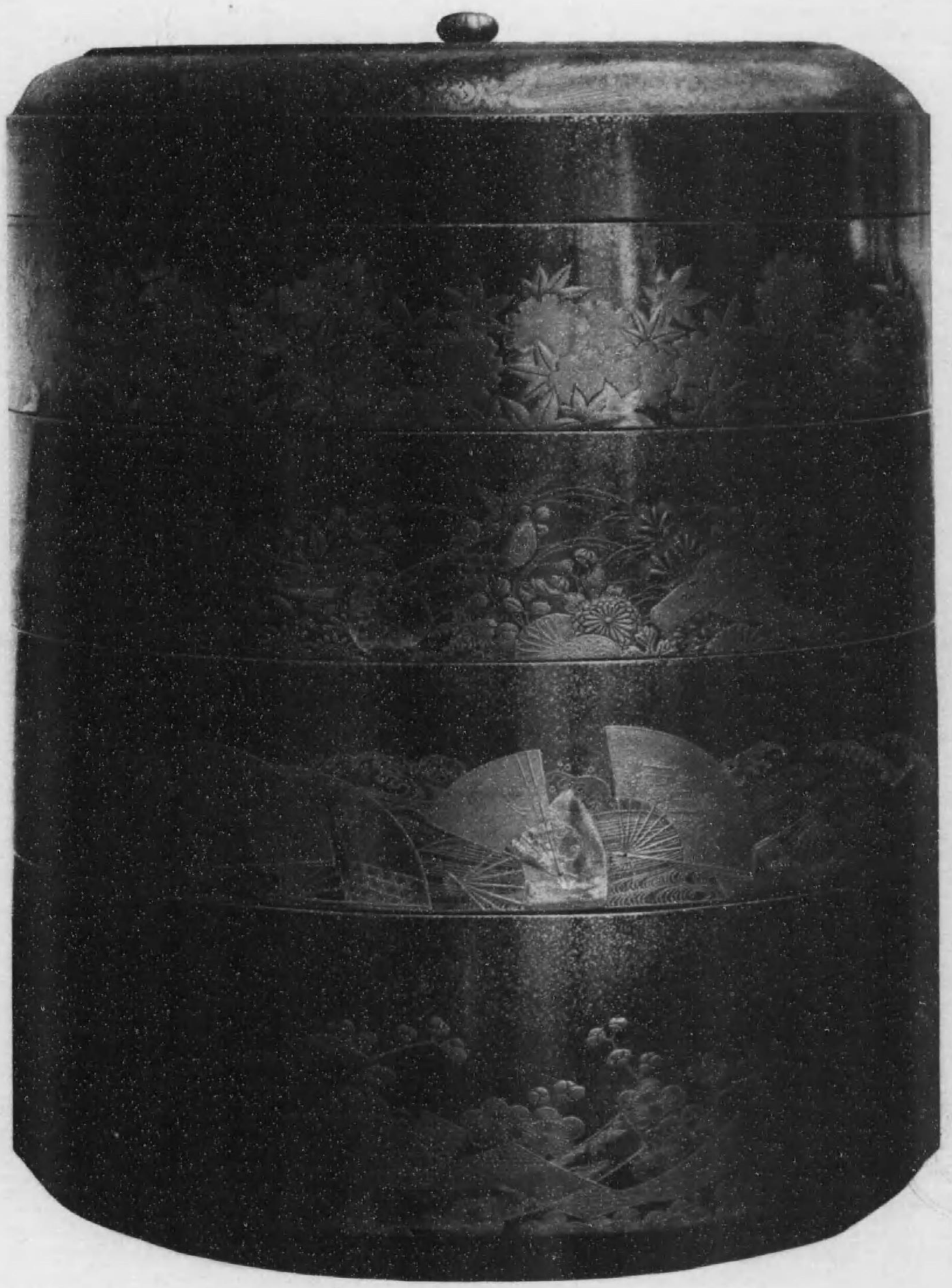
第十二圖＝若沖の紅葉

本圖は以前京都今出川相國寺の珍藏せる伊藤若沖筆花鳥畫三十六幅對中の一にて紅葉小鳥圖の部分である。今は宮内省の御買上げとなつてゐるものであります。（若沖傳上編第六集牡丹之卷參照）

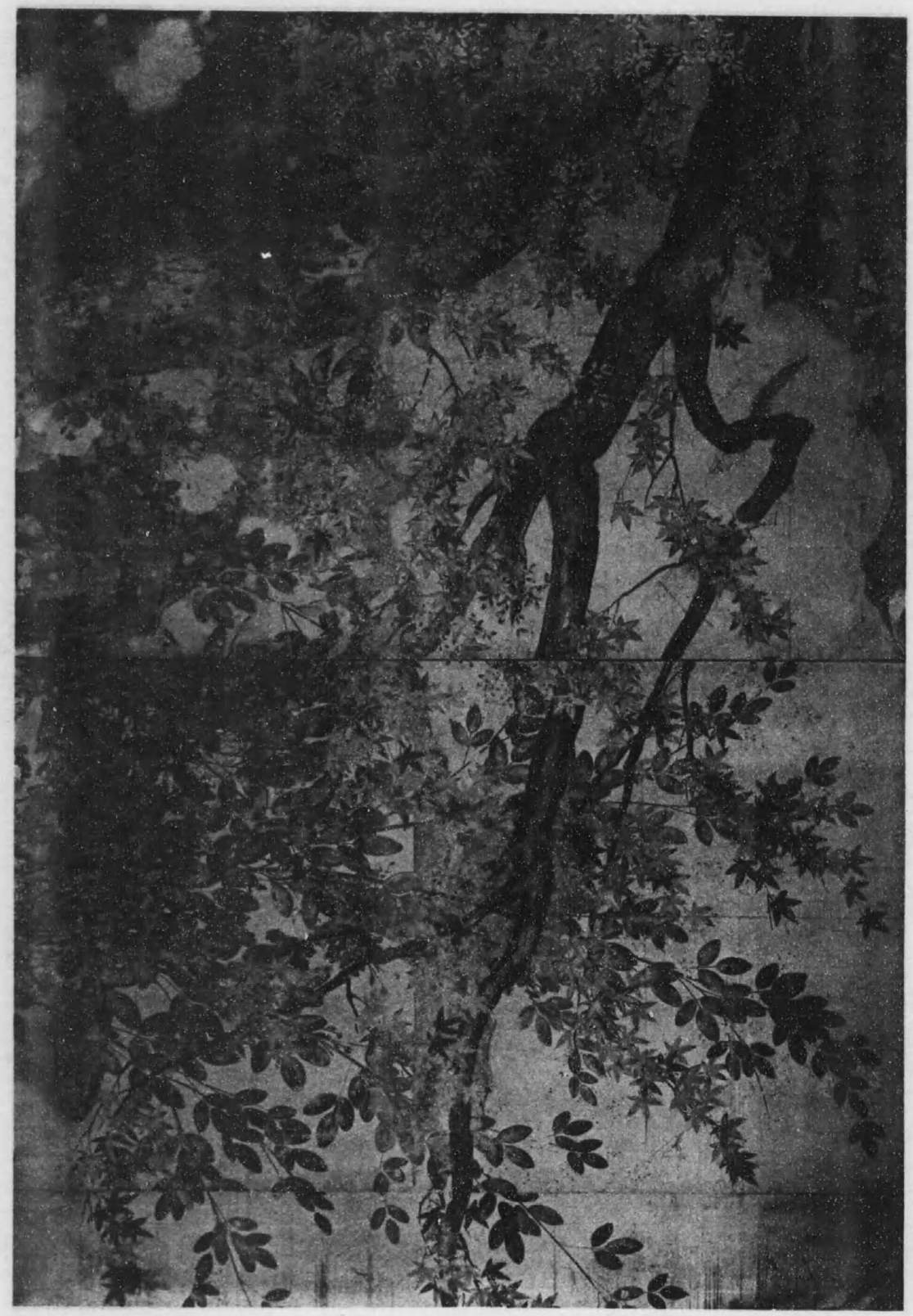
第十三圖＝永岳の紅葉

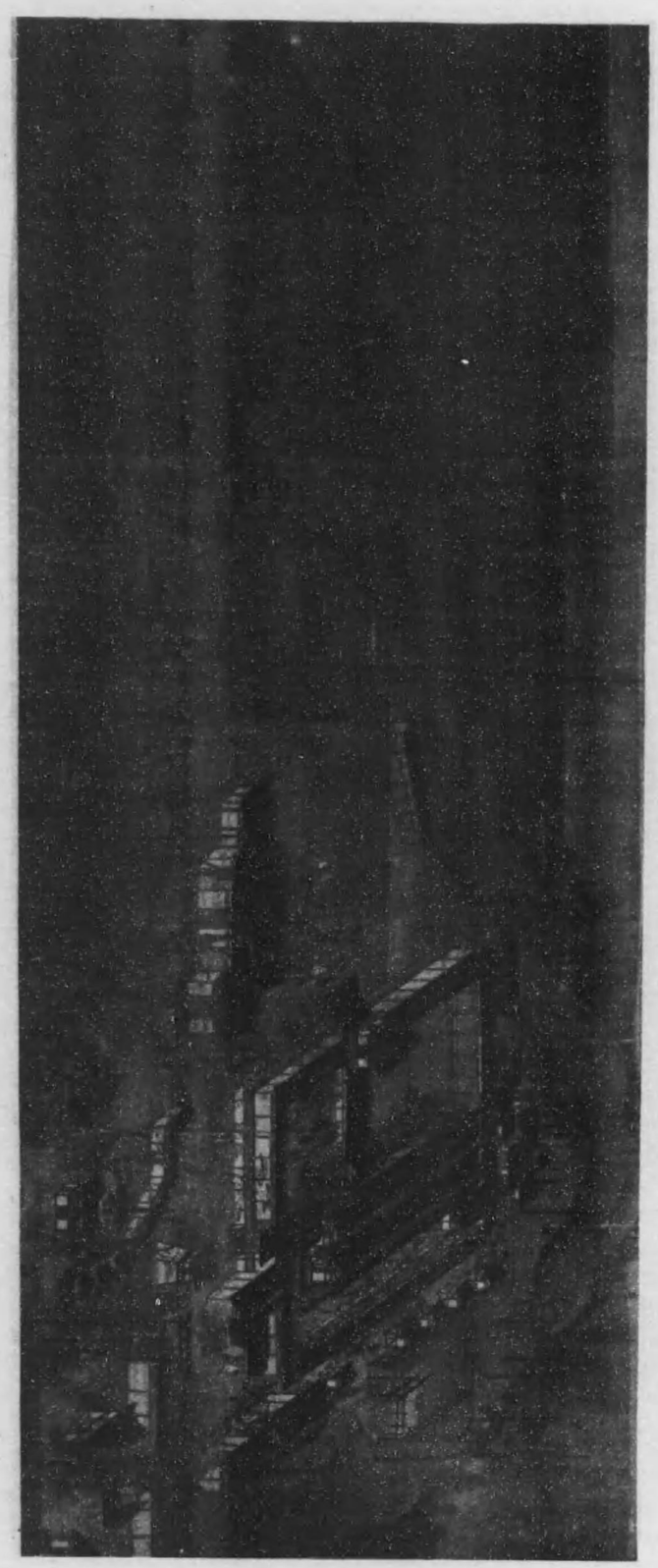
本圖は京都市外花園妙心寺塔頭隣華院方丈襖繪の部分であります。筆者永岳は永俊の義子で狩野助と稱して居りました。京師の人、京狩野永納の畫風を繼ぎ且つ四條風の筆意を雜へて家格を變じました。天保年中名聲の高かつた人であります。

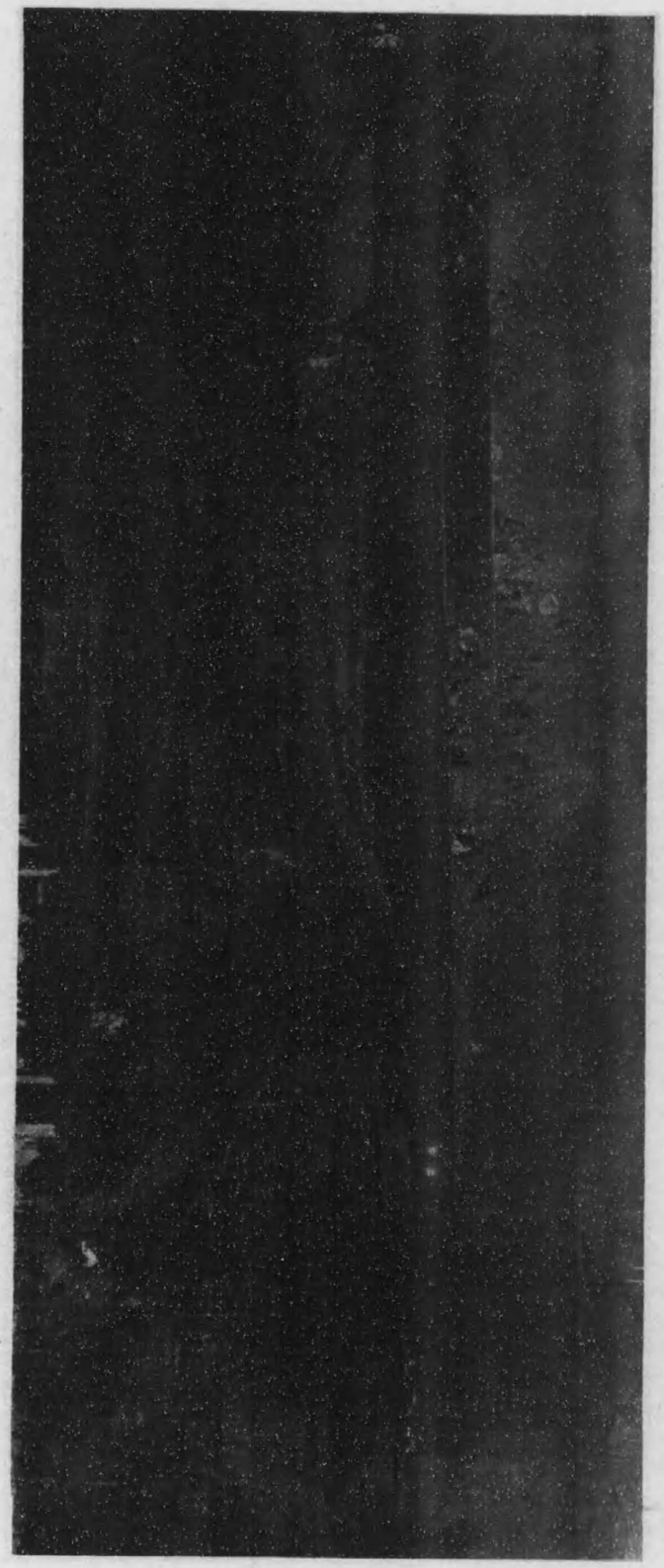
以上

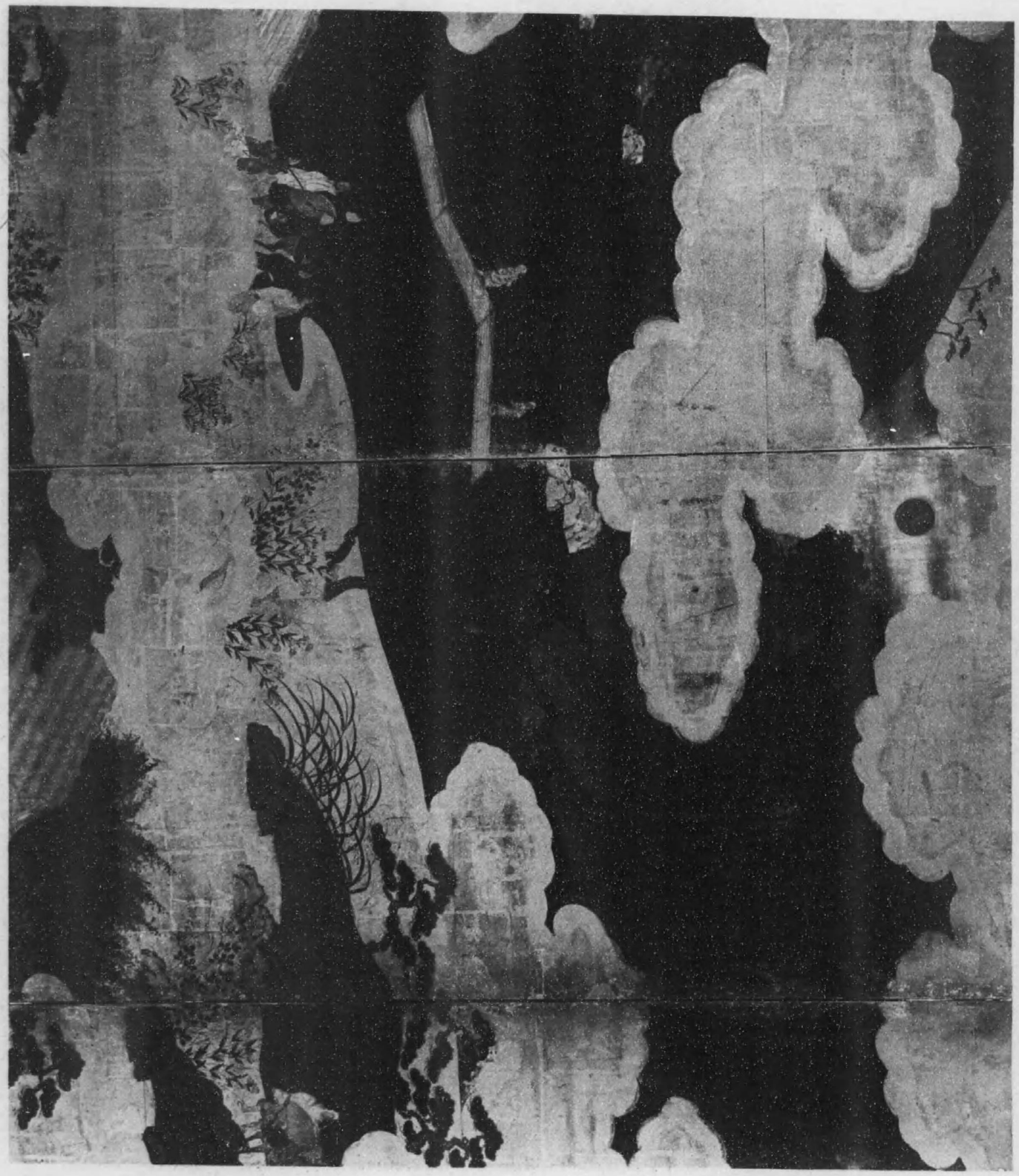


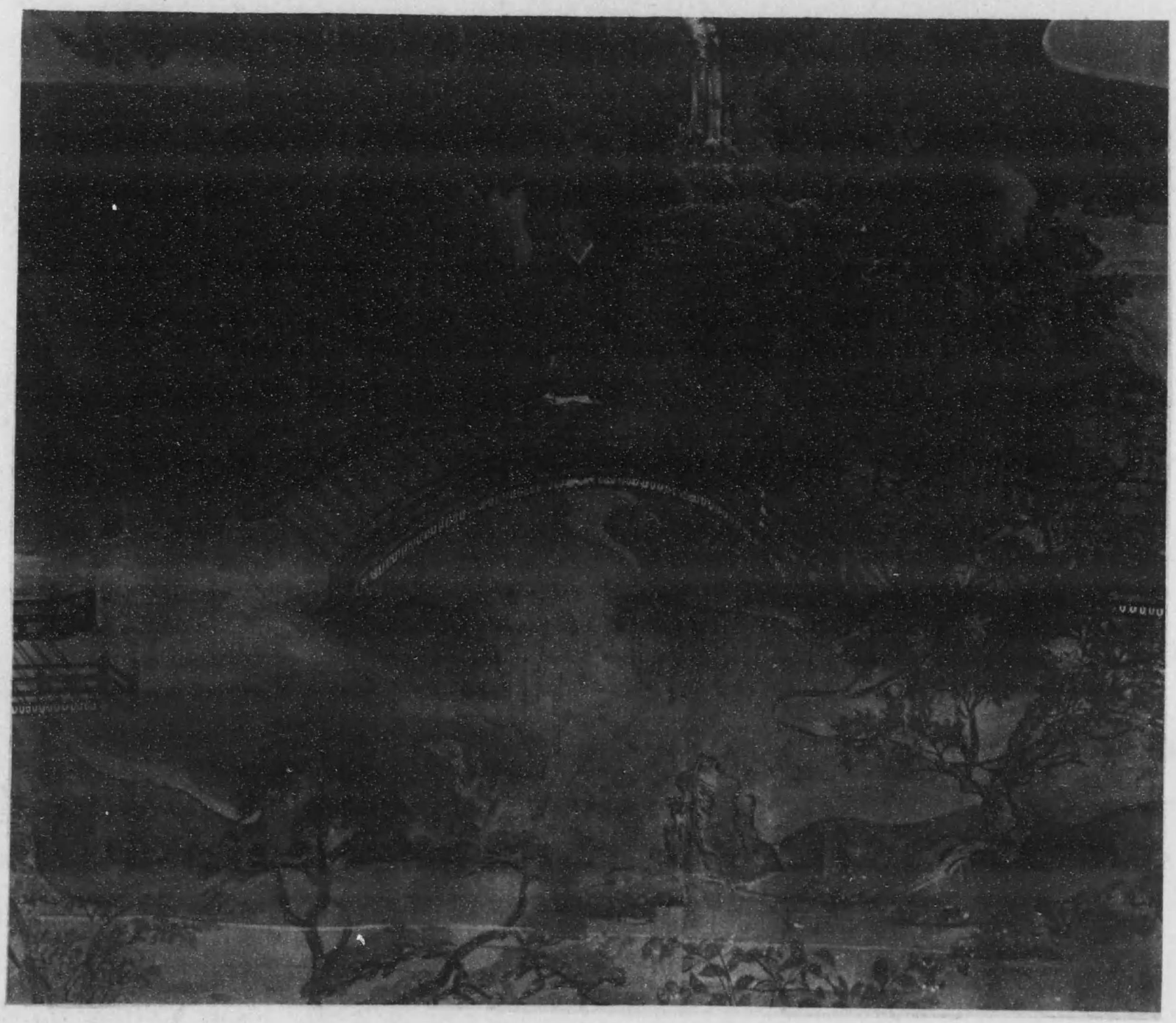
1

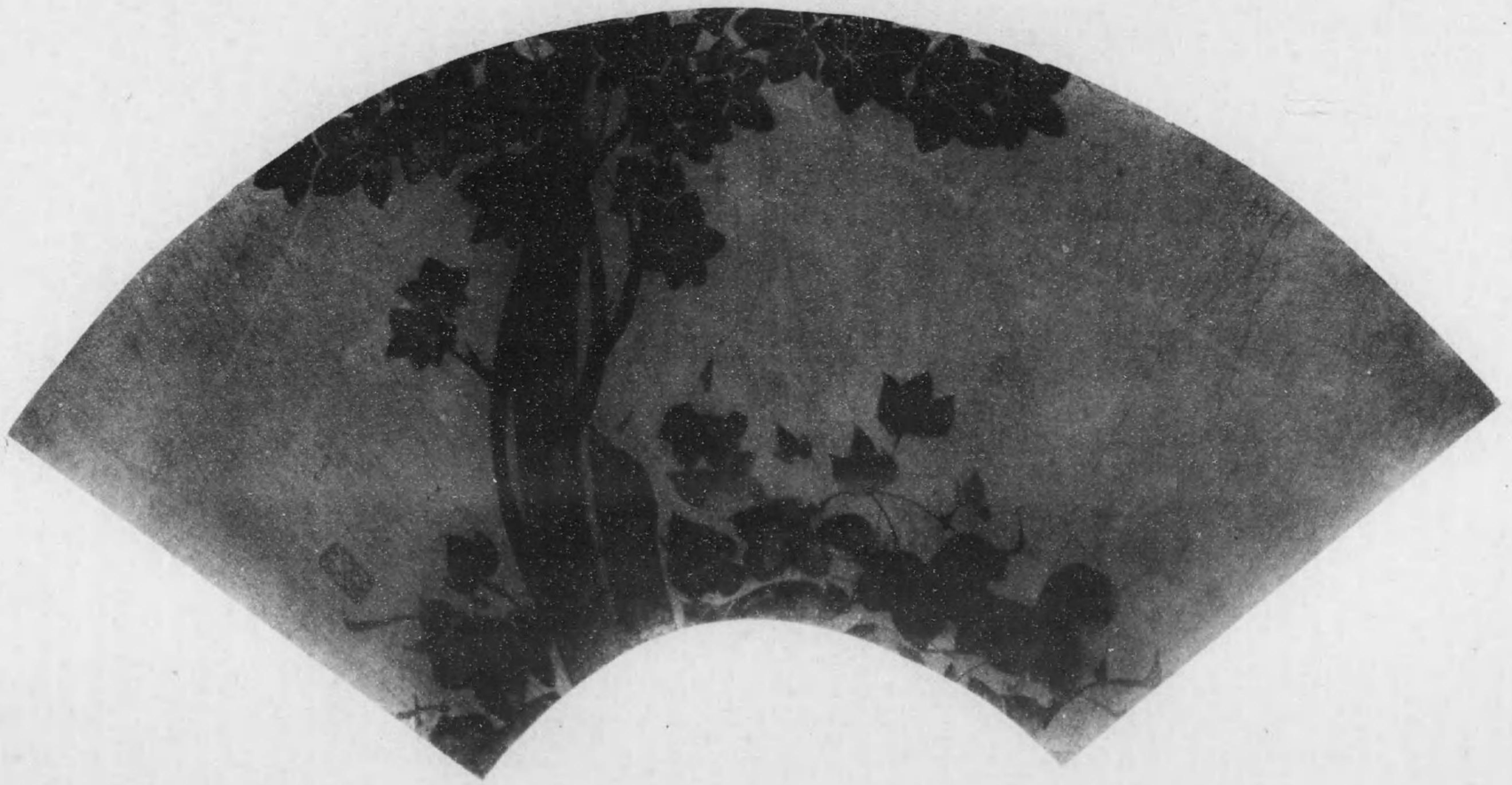












藝林畫譜第十四集「鶴の巻」編纂について

瑞祥の表象として繪畫に彫刻に、乃至一般工藝に鶴を表現するは我朝獨自の傳統である、由來鶴は支那朝鮮に群棲し動物學上涉禽類に屬して居る、性極めて潔癖にして食物は洗滌して食ひ、暴食鯨飲をつゝしみ其壽長きが故に鶴に千年の語がありされば藝術家は擧つて之をうつし狩野派圓山派の作家にして鶴に親しめるもの頗る多い、本集は洛中洛外に現存せる鶴の圖中より嚴撰して複製せるもので、近く大正十二年の迎春を控ゆるに先だち作家諸彦の一資料として發行したのである。

大正十一年十月

編者しるす

鶴之巻内容目次及略解

第一圖‖應擧の鶴

本圖は京都高臺寺畔平井仁兵衛氏別邸秘藏の圓山應擧筆六曲屏風の片双にて民間屏風中の名物ものである。（應擧傳略）

第二圖‖尙信の一羽鶴
第三圖‖仝の二羽鶴

兩圖共京都東山知恩院大方丈鶴の間の襖繪にて狩野尙信の筆であります、尙信は本拢町狩野の開祖にて孝信の神子、守信の弟である、初めの名は一信圭馬と稱し自滴齋と號す、山水人物草木魚龍馬獸等描く處佳ならざるはなかつた、慶安三年四月七日年四十四才にて歿した。

第四圖‖傳呂紀の鶴

本圖は京都寺町本能寺の藏幅にて呂紀の筆と傳ふるもので京都帝室博物館に寄託せるものである、呂紀は明人にて寧波の人、初め花鳥を邊景晤に學び唐宋の名畫を模し遂に妙境に達して當代を獨步した、殊に鳳鶴孔雀鴛鴦の如き設色鮮麗、生氣奕々たるものあり後世其踐を躡ぐものなしと稱せられて居る。

第五圖‖元信の鶴

本圖は京都東山南禪寺清涼殿の襖繪にて狩野元信の筆と傳へられ筆致雄健にして表現極めて軟かく元信作品中最も優秀なものである。（元信傳略）

第六圖‖林良の鶴

本圖は洛東高臺寺所藏の壽幅にて林良筆と傳へられ京都帝室博物館に寄託されて居る、林良は明人にて廣東に生れ以善と號し、花果羽毛頗る精巧を極め禽鳥樹木の水墨をよくした。

第七圖‖筆者不詳の鶴…其一
永俊の鶴…其二

兩圖の中、其一は京都東山禪林寺の襖繪にて筆者は不詳なるも雲谷派の鶴としては最も優秀なる作品である、其二は京都聖護院の襖繪にて永俊の作と傳ふるも果して永俊なるやは疑はしい。（永俊傳略）

第八圖‖探幽の鶴

本圖は洛西嵯峨大覺寺の杉戸にして狩野探幽の筆と稱するもので坊間に名高き作品である。（探幽傳略）

第九圖‖若冲の群鶴

本圖は元京都相國寺藏の若冲筆三十余壽幅の一にて其後宮内省に御買上げとなれるもので若冲獨特の構圖である。（若冲傳略）

第十圖‖應震の鶴

本圖は京都今熊野白木申三氏の藏幅にて京都帝室博物館に出品せる圓山應震の作品である、應震字名は仲淵、應受の子にて應瑞の義子となり山水花鳥をよくし天保十一年二月十七日病歿しました。

第十一圖‖牧溪の鶴

本圖は洛北大德寺本山所藏の牧溪筆絹本墨畫にて中觀音左右猿鶴の三幅對の鶴の一幅にて今は京都帝室博物館に出陳中の國寶であります、牧溪名は法常、南宋の人であります。

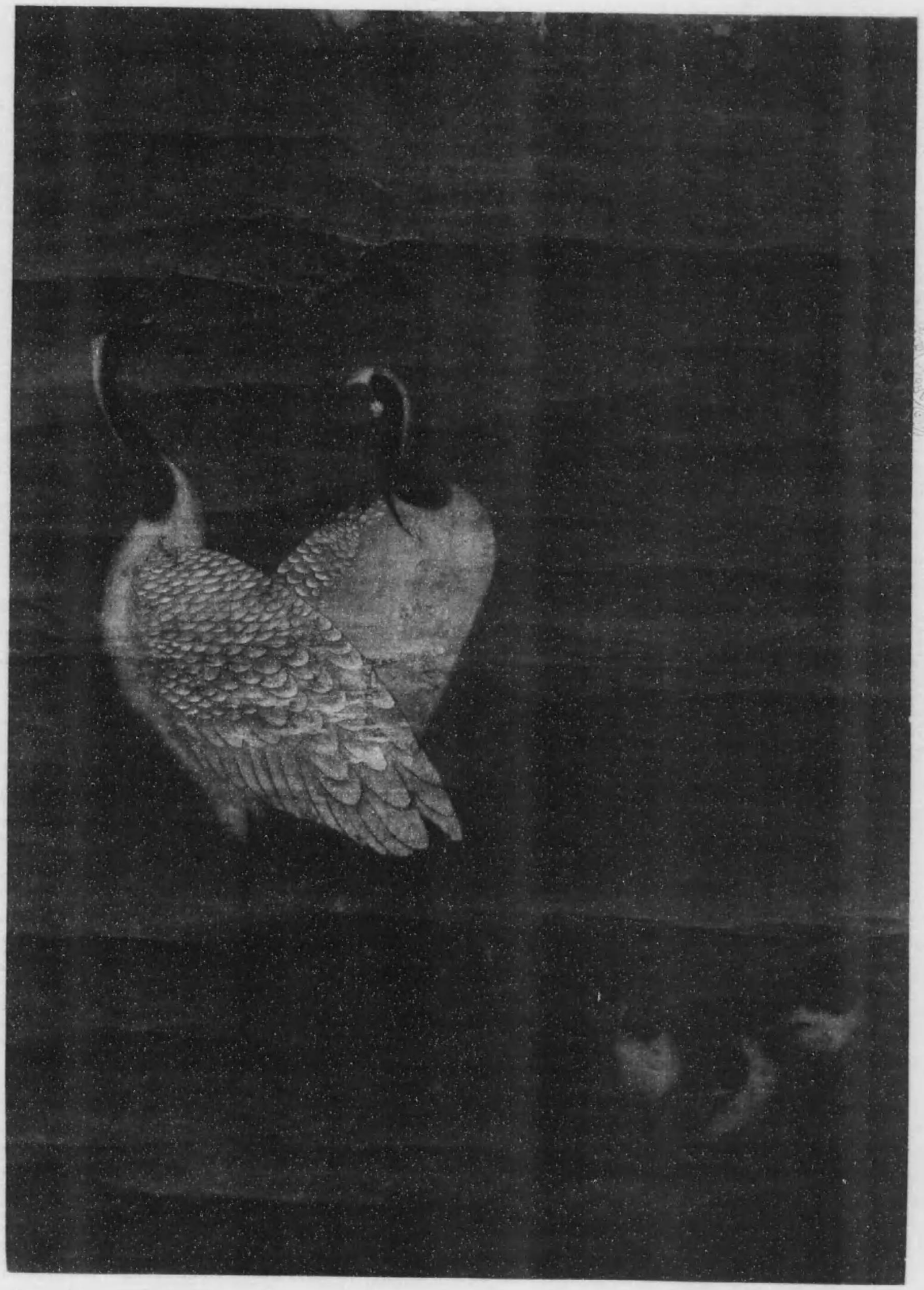
第十二圖‖傳永俊の鶴

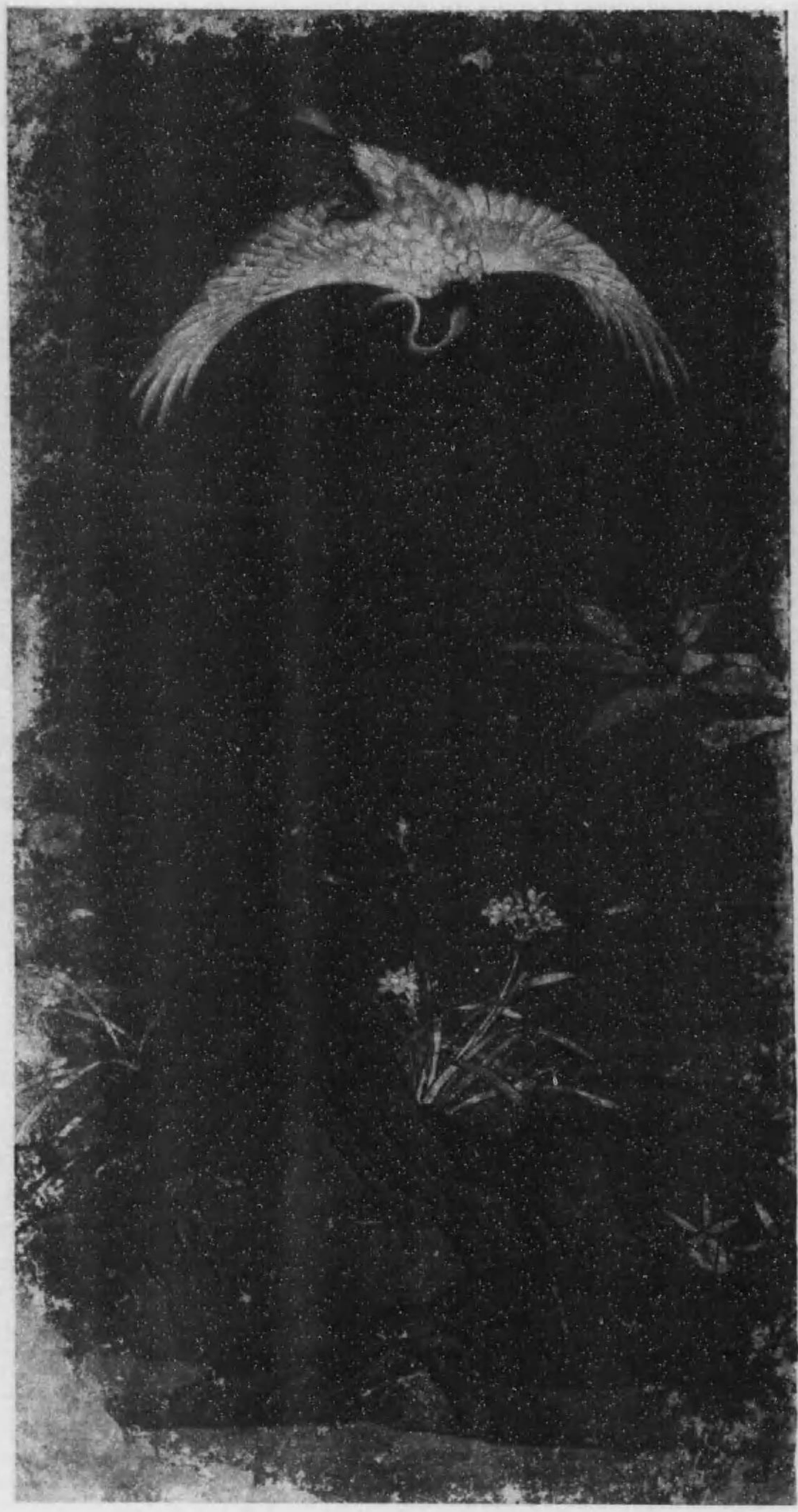
本圖は京都聖護院襖繪の部分にて永俊の作と鑑定されて居る。（永俊傳略）

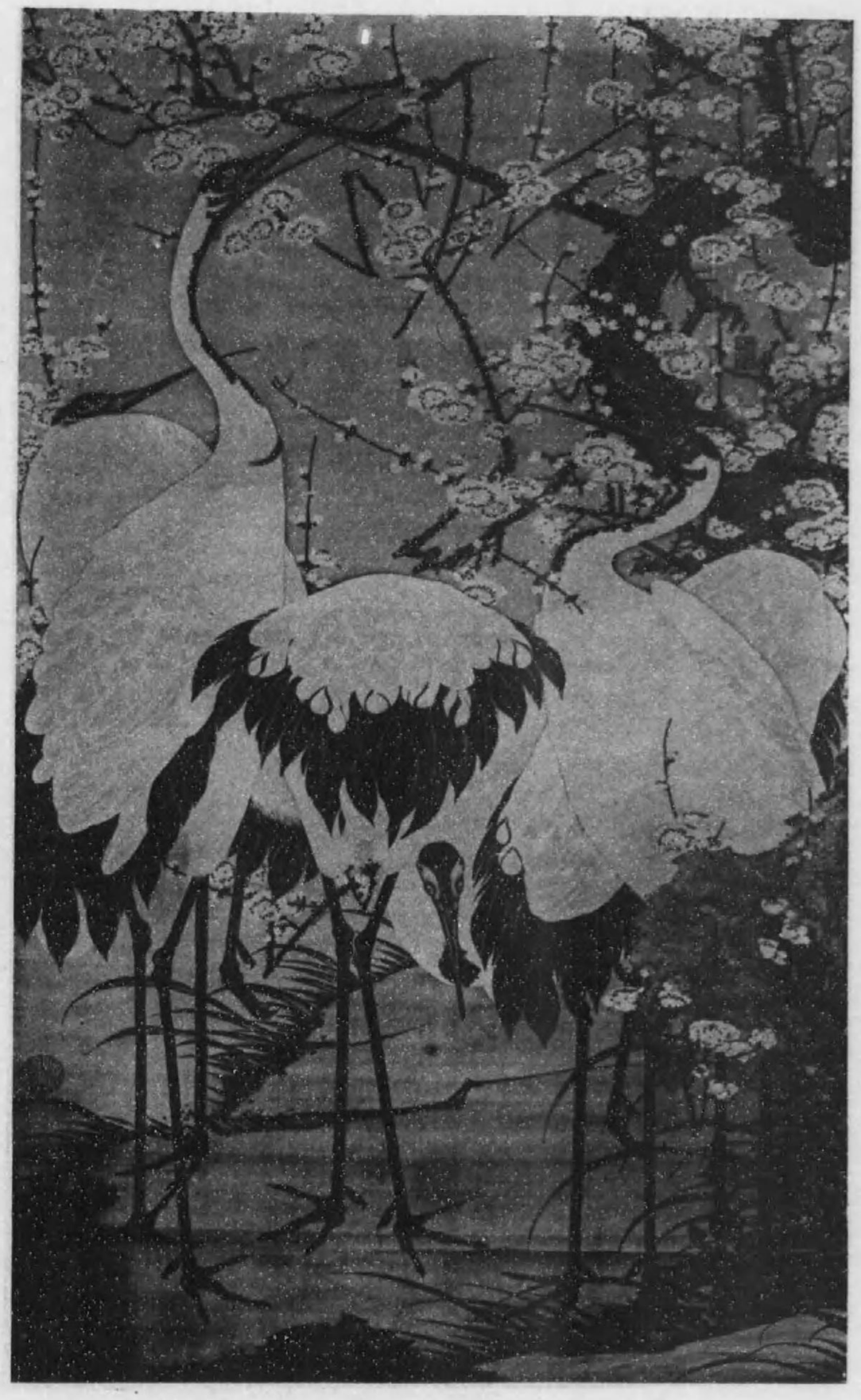
第十三圖‖刺繍の鶴

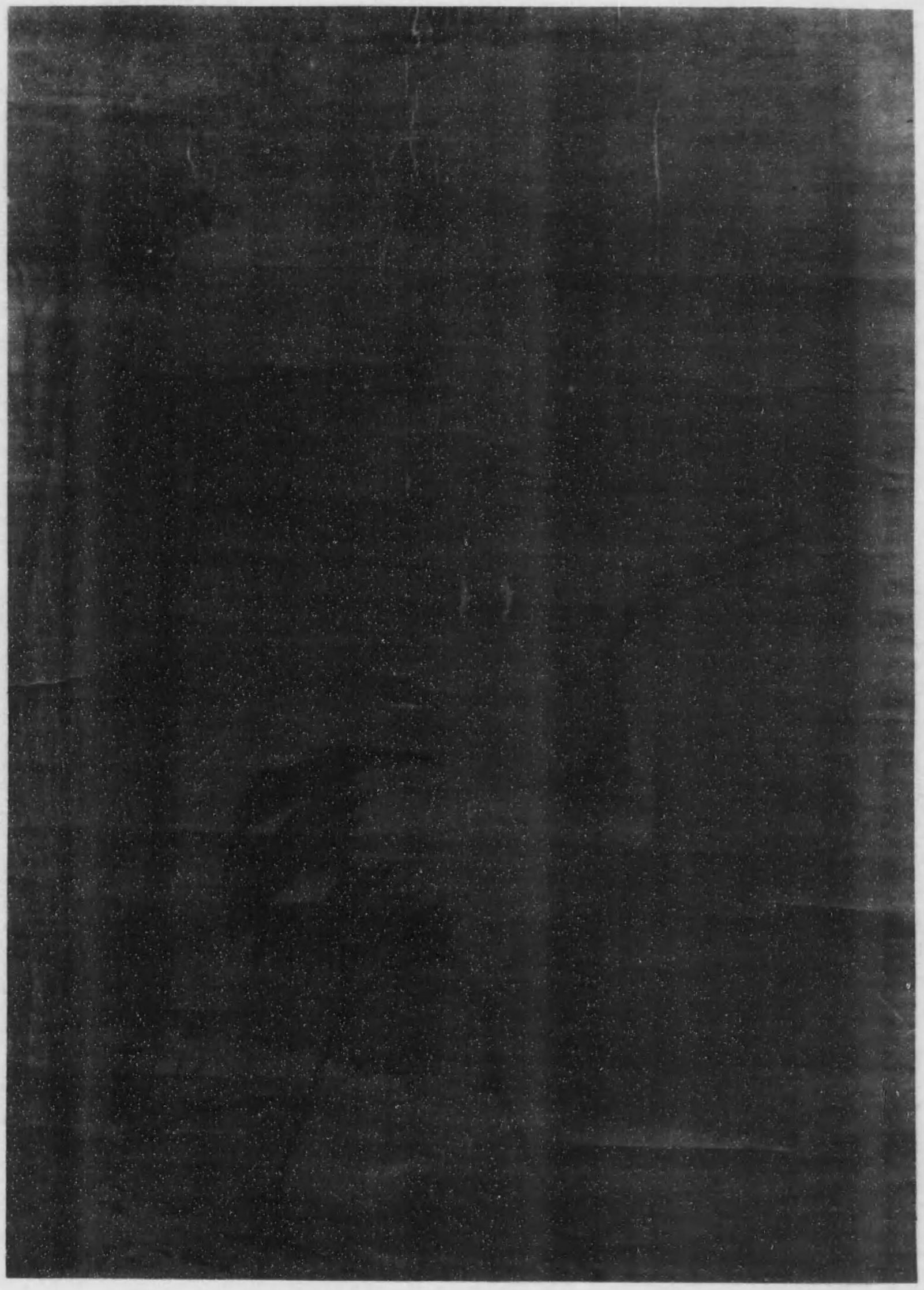
本圖は京都木屋町三條下ル瑞泉院の所藏にて京都帝室博物館に寄託中の豊臣秀次公愛妾絳世の和歌二十幅の一の表裝裂地であります。

STRASSER









藝林畫譜第十五集『雲の卷』編纂について

山は綠りに水白く、而も四圍蒼海を饒らせる我が島國は常に水蒸氣を以て包まれ、隨つて雲影の變態極まりなき妙趣は藝術家の心を唆らずには止まない。殊に一天萬乘の君を戴く日本として は九重の雲上を思ひ、又佛敎國民として紫雲の搖曳を想ひ、更に又今年の御歌所御題が「曉山雲なるに想到する時に藝術的感興の一層深きものがある。茲に於て、藝術家の參考資料たり畫引たることを自任する我が藝林畫譜が、雲に關聯せる過去の藝術を蒐集して諸賢の座右に供す所以は決して遇然ではない。

大正十一年十一月

編者しるす

雲之卷內容目次及畧解

第一圖＝曼荼羅の雲

本圖は京都市新京極淨土宗西山派本山誓願寺の秘藏にて京都帝室博物館に寄托中の絹本着色春日曼荼羅一幅の部分で、筆者は未詳であるが南北朝時代のものと認められて居る。

第二圖＝圓伊の雲

京都市東山歡喜光寺秘藏の國寶圓伊筆一遍上人繪卷の部分にて絹本着色である。雲及び霞等を巧みに應用して遠近の心持を表現せるものである。本圖も亦京都帝室博物館に出陳中のものである。

第三圖＝佛畫の雲

本圖は京都智恩院秘寶中の秘寶たる廿五菩薩早來迎圖にて惠心僧都の作と傳へられて居る絹本着色の大幅にて勿論國寶であつて京都帝室博物館に出陳せるものである。

第四圖＝狩野派の雲

本圖は京都市西洞院佛光寺上ル關觀水氏の所藏せる六曲金碧絹彩色風景畫の一部である。此種狩野派は由來金箔を以て雲ごりを巧みに扱ひ構圖の變化と統一とそして遠近の調子をとつた。本圖はこの意味に於て揭載せるもので德川初期の末より中期にかゝる作品であるが筆者未詳である。

第五圖＝蒔繪の雲

本圖は京都市田中國田町宇田豊四郎氏所藏の金高蒔繪重硯の側面圖案にて德川中葉の作と見らるゝものである。現品は京都帝室博物館に出品されて居る。

第六圖＝光信の雲

本圖は大阪府下南河內郡古市町譽田神社秘藏の譽田宗廟緣起(三卷)の一部にて今は東京帝室博物館に出陳せる國寶である。作者は土佐光信と傳へられて居る。

第七圖＝傳光興の雲

本圖は洛北大德寺塔頭高桐院秘藏の傳土佐光興筆六曲金碧小屏風の一部にて圖は山王祭である。今は京都帝室博物館に陳列されて居る。光興の傳は詳かでない。

第八圖＝笠置繪卷の雲

本圖は京都府下相樂郡笠置山笠置寺珍藏の笠置開創緣起繪卷の一部(二圖)にて技巧稚拙に見ゆれども信念の流露せる處、珍重すべき逸品であるが筆者は不詳。

第九圖＝應擧の雲

本圖は京都市東洞院御池上ル內貴甚三郎氏の所藏せる八曲屏風應擧筆雲龍の片双で片双は岸駒筆溪に虎の圖である。(應擧傳略)

第十圖＝懷紙地模樣の雲

本圖は府下山科村天台宗門跡毘沙門堂秘藏の後柏原帝宸翰和歌懷紙地模樣にて泥及青泥を以て輕快に表現せる雲や草木の味は捨て難きものである本圖は目下京都帝室博物館に寄托されて居る。因に後柏原帝御名は勝仁、大永元年三月廿二日御卽位大永六年四月七日に御崩御になつた。

第十一圖＝琴浦宮繪緣起の雲

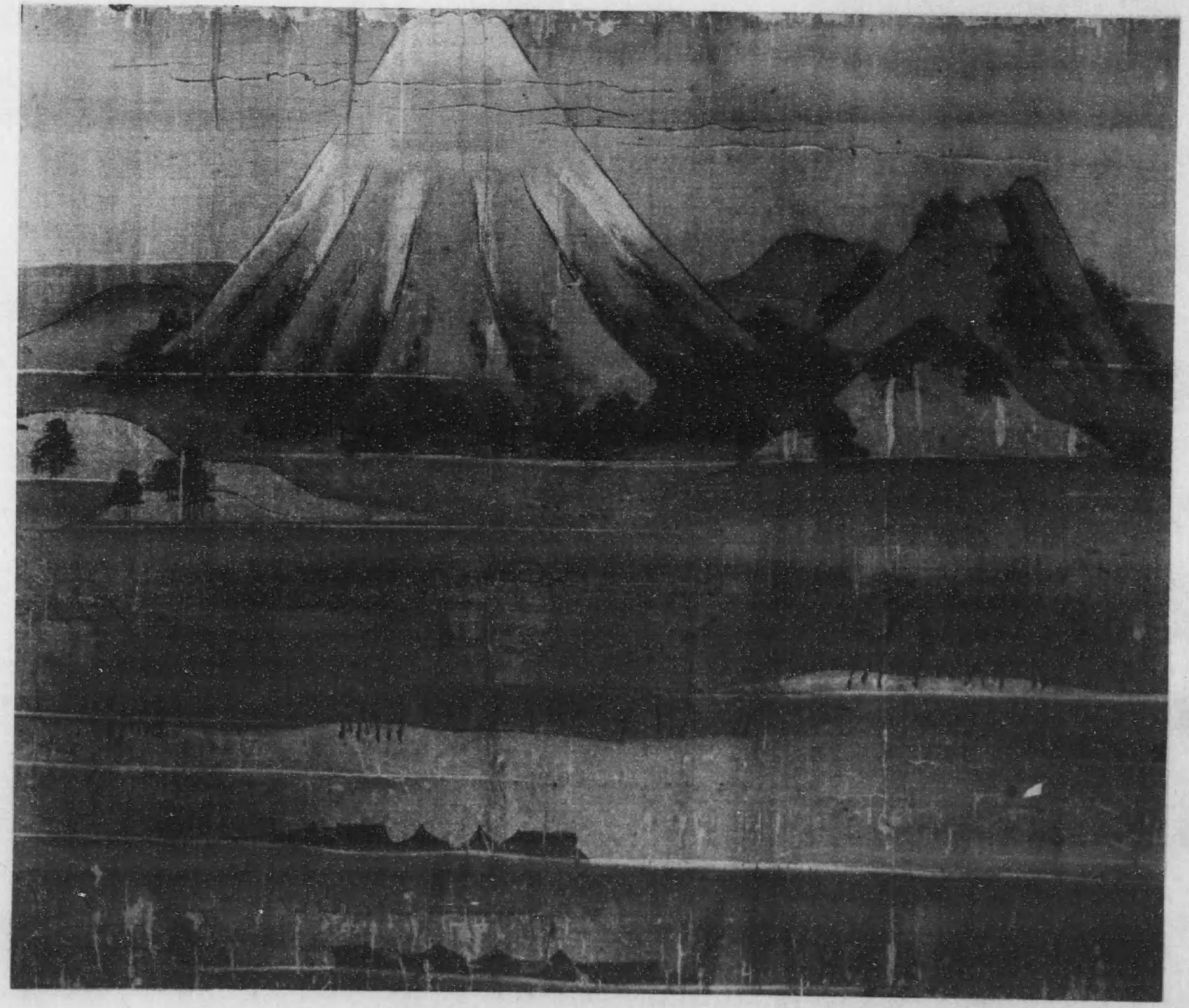
本圖は香川縣三豊郡觀音寺所藏の國寶絹本着色琴浦宮繪緣起の一部であるが筆者は未詳である。

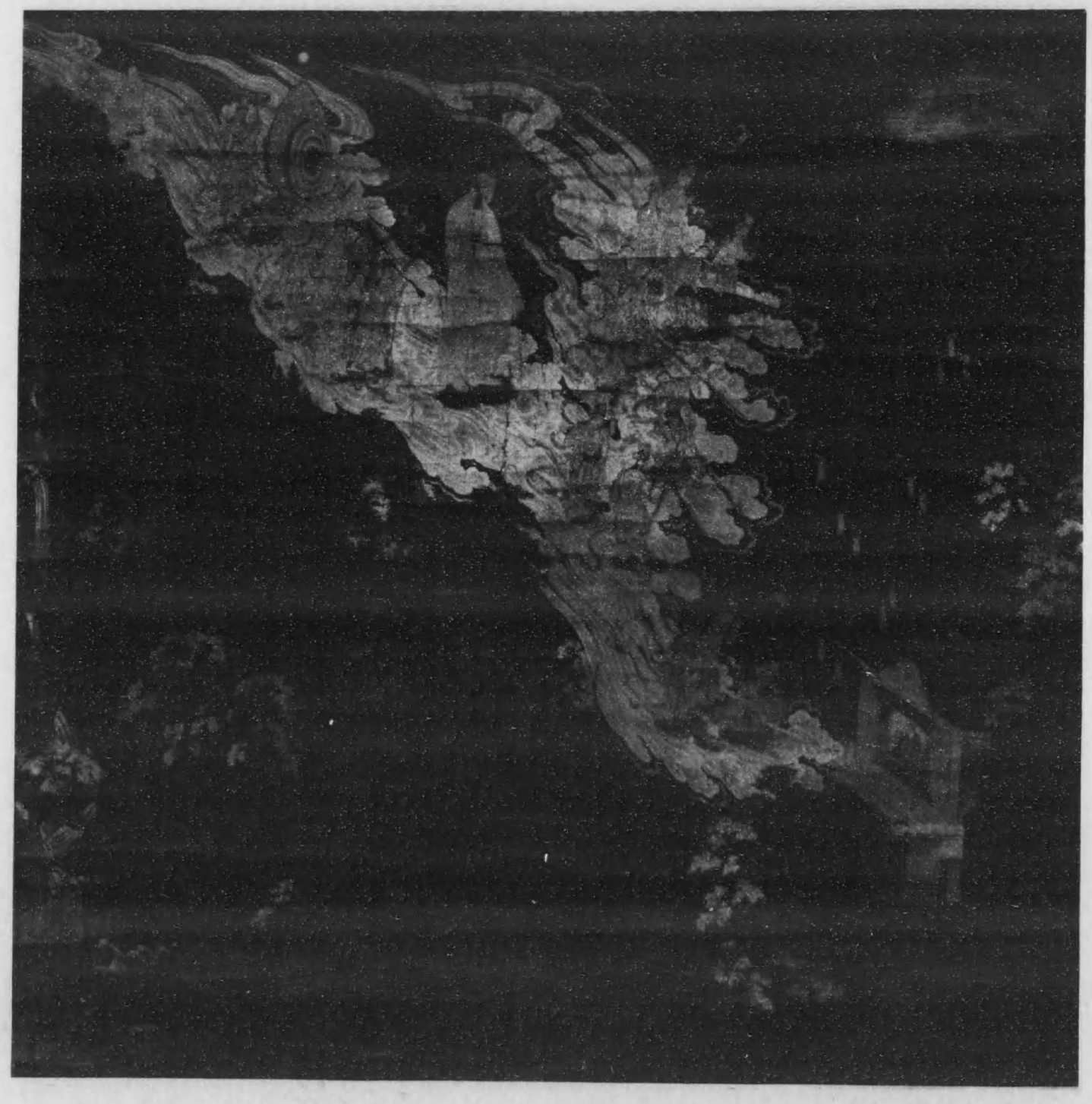
第十二圖＝久國の雲

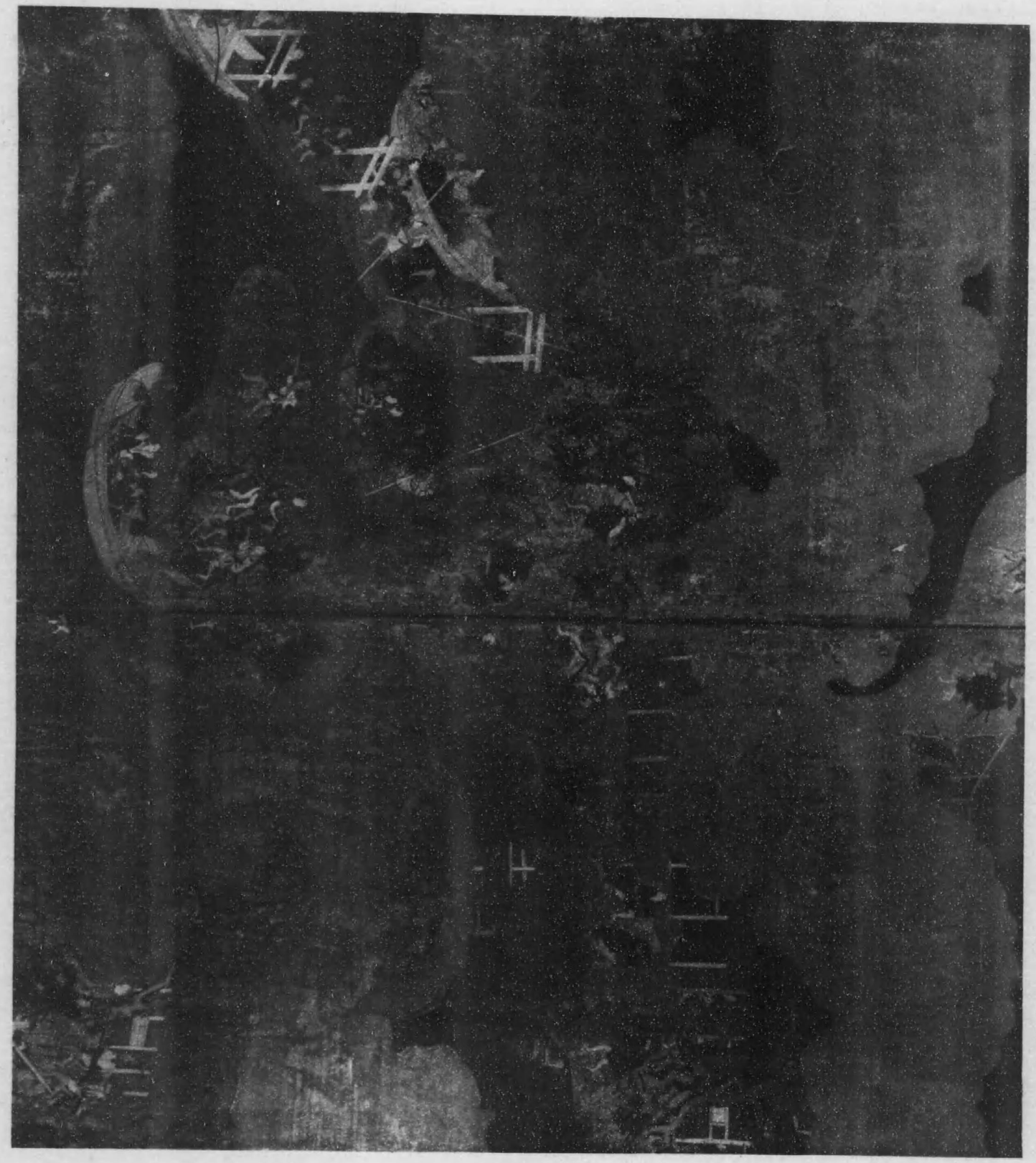
本圖は京都市眞正極樂寺所藏の國寶、紙本着色三卷、掃部介久國筆眞如堂緣起の一部にて繪詞は後柏原天皇外四筆である。是れ亦京都帝室博物館に出陳中のものである。筆者掃部介久國の傳記は未詳であるが大永頃の人と認められて居る。

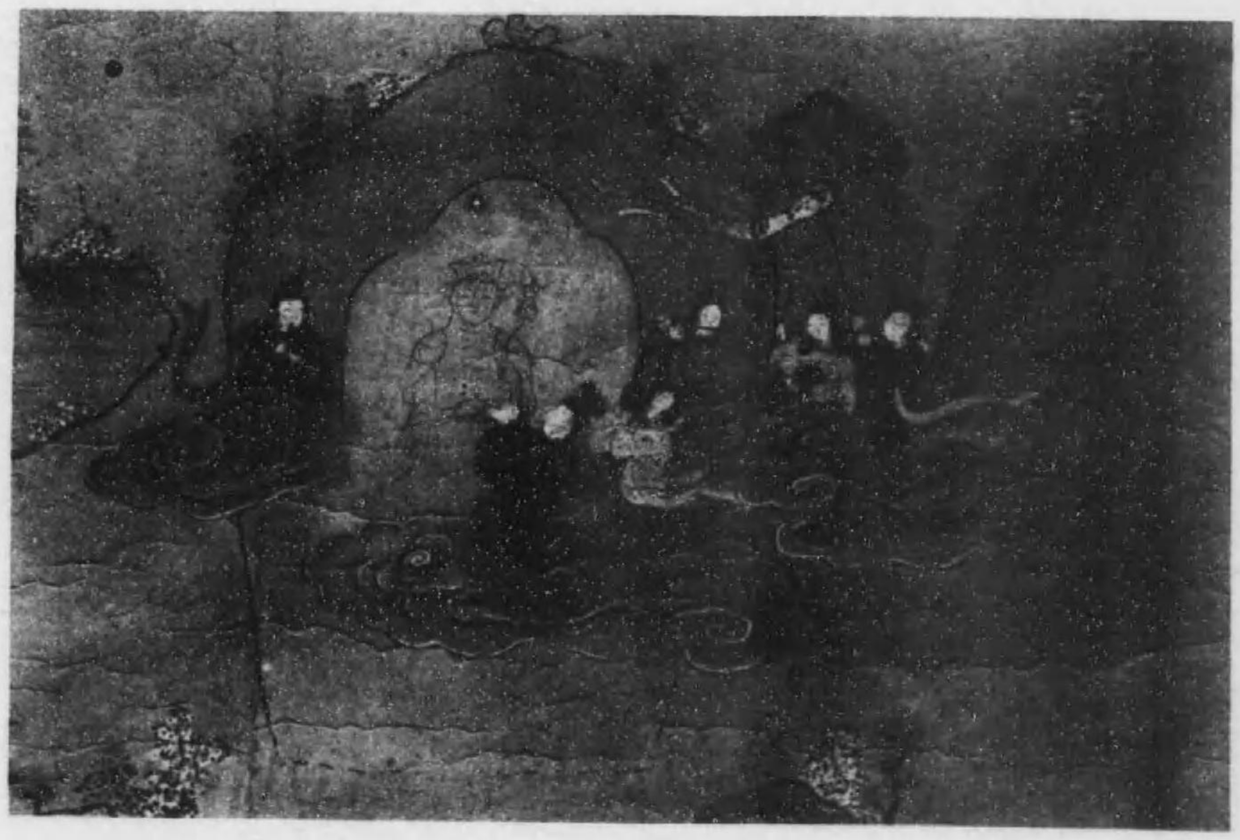
第十三圖＝青貝の雲

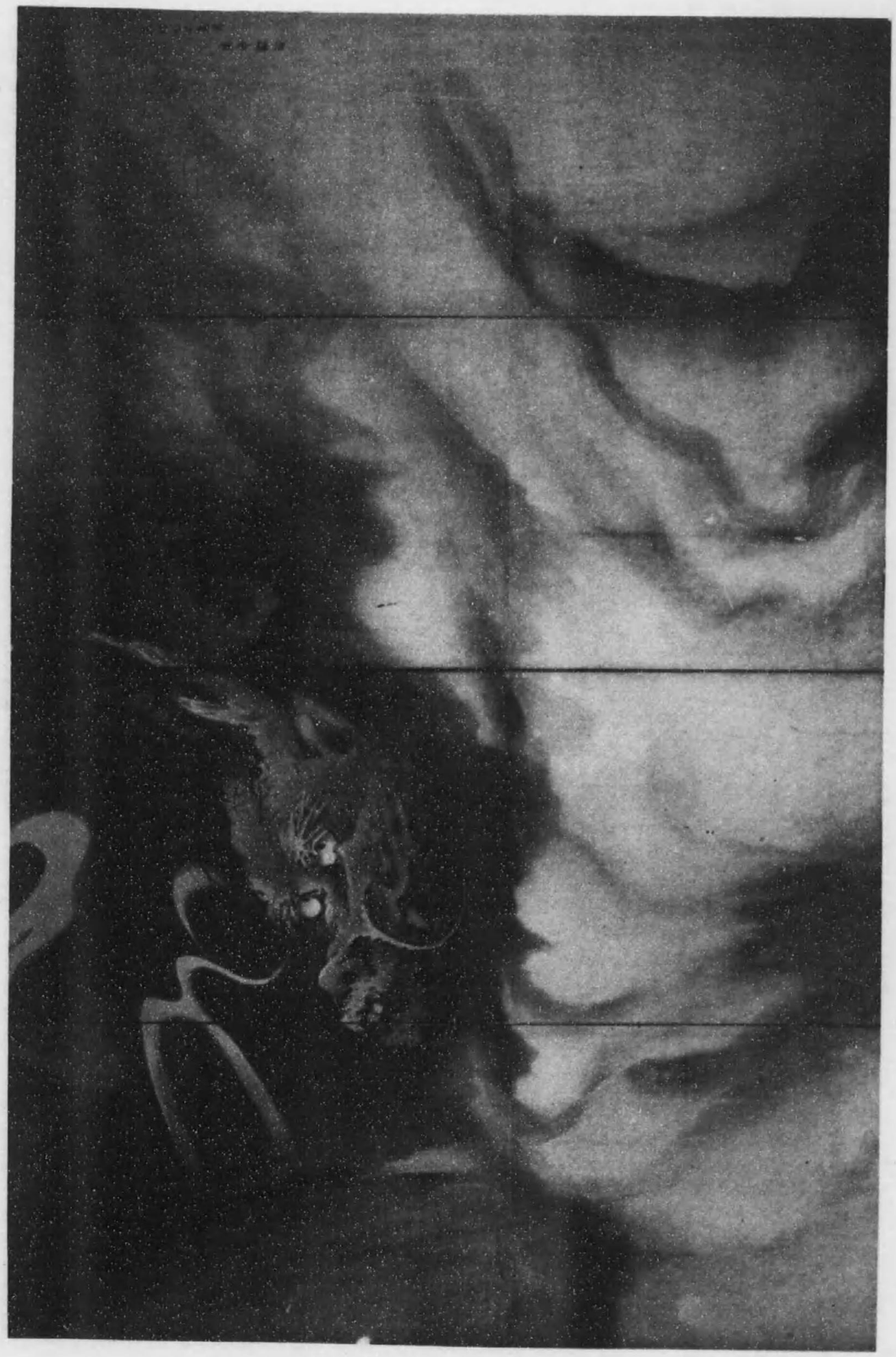
本圖は京都帝室博物館所藏の青貝人物棚干付卓の橋欄まである。

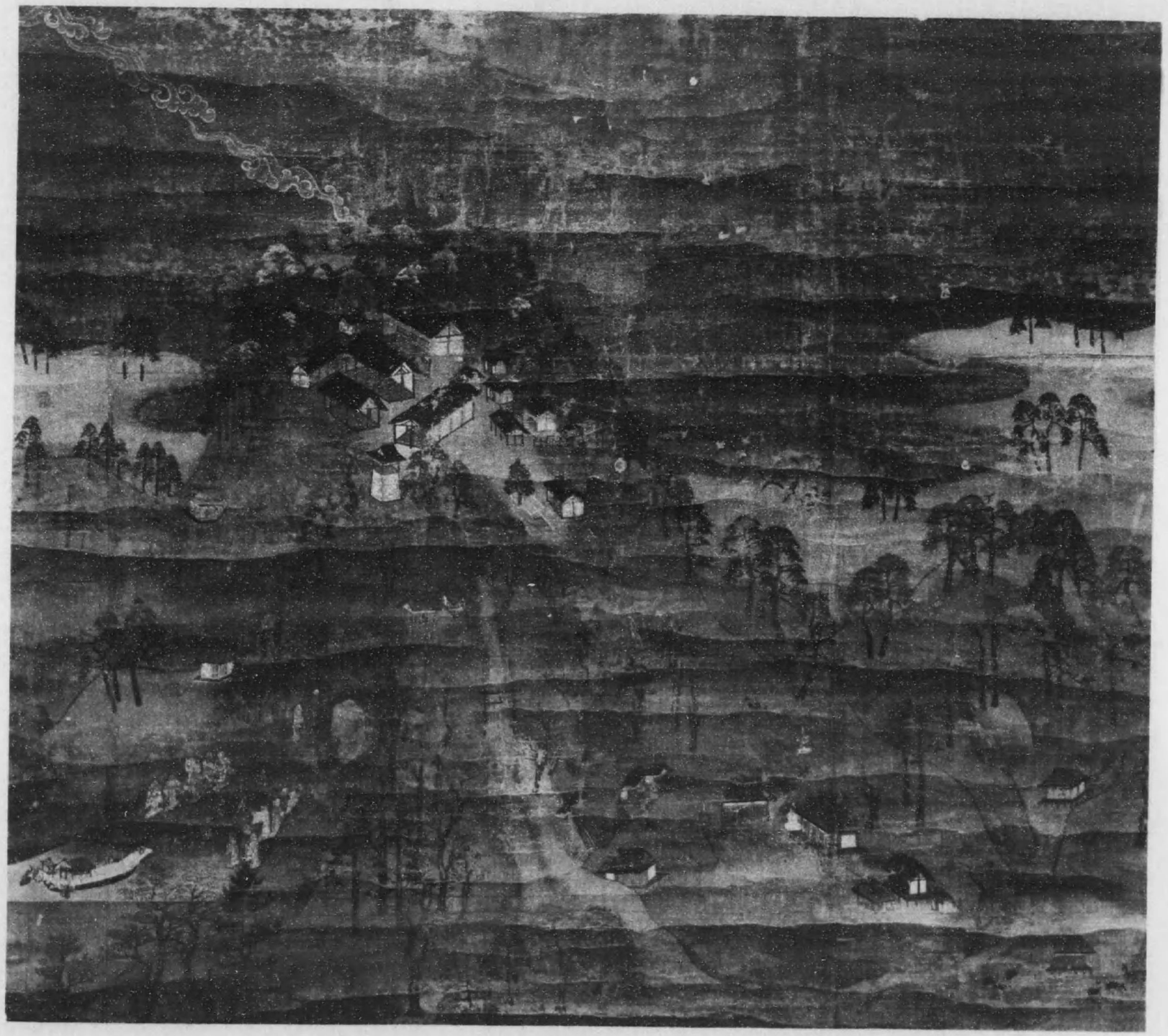


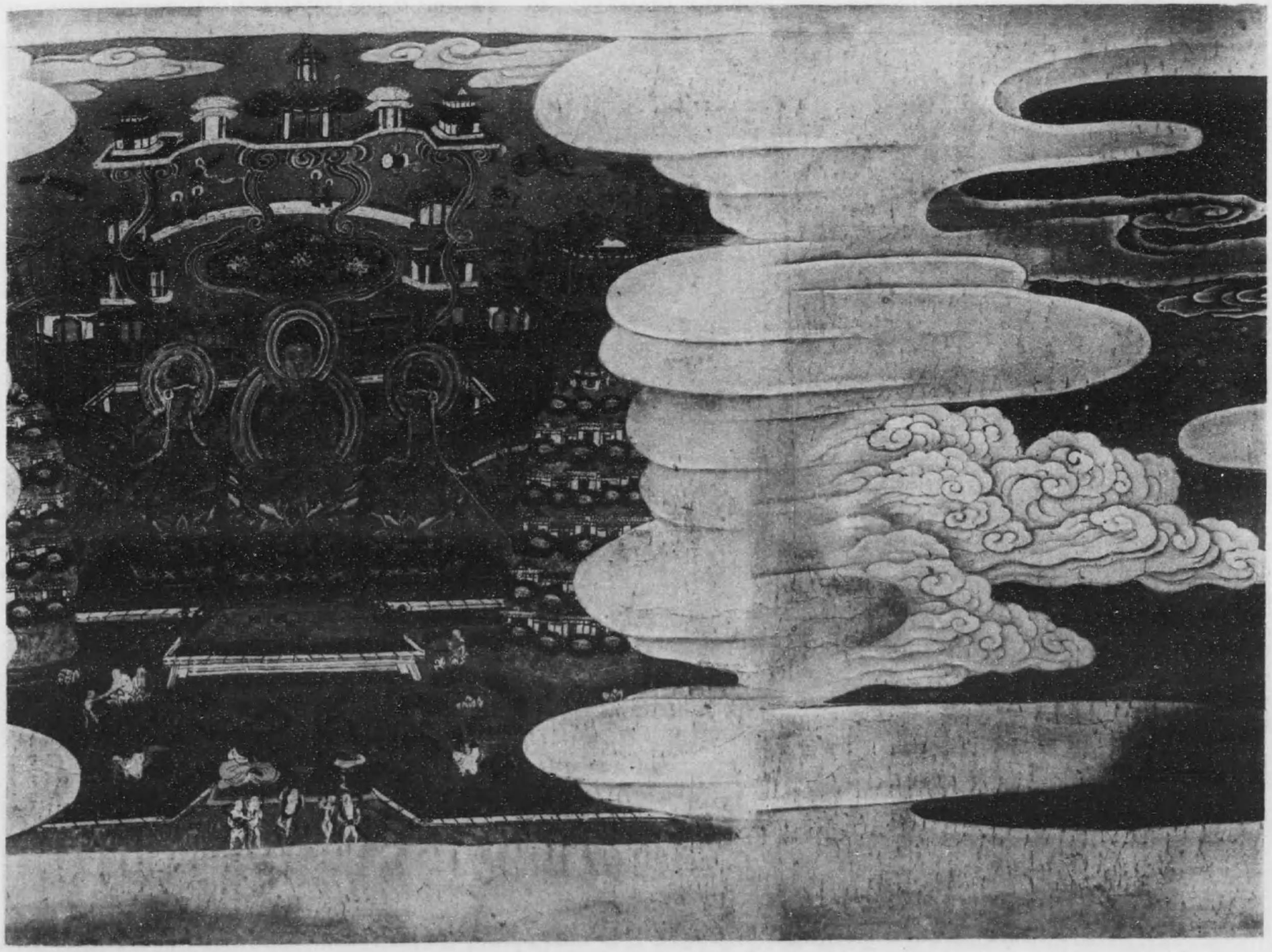


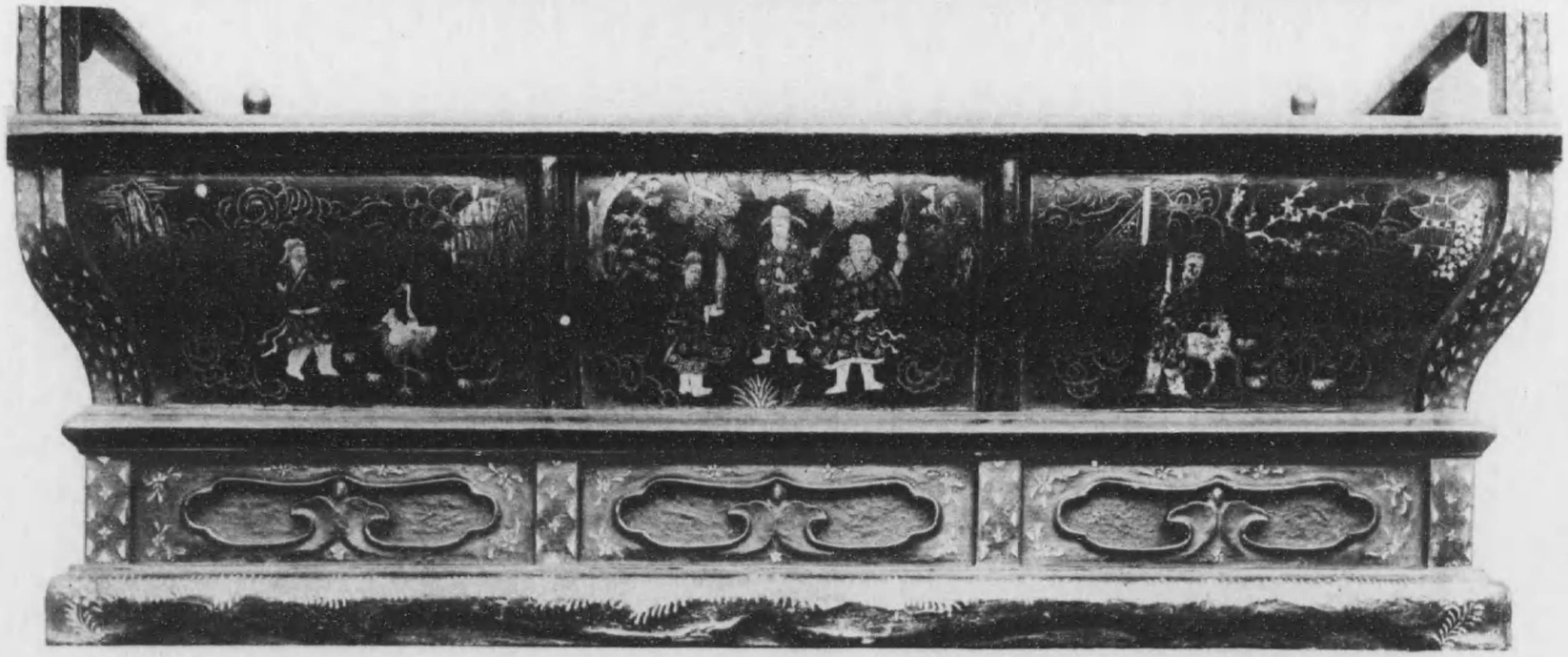












藝林畫譜第十六集雪の卷編纂について

朔風徒らに吹き荒む寒林に、一夜にして萬朶の花を粧はしむるものは雪であります。彼の紛々たる飛雪の風情、皚々たる積雪の景趣に、そゞろ清興を覺ゆる東洋の畫人は、好んで之を描寫した爲めに古名畫に雪を見ること頗る多いのであります。本集は實に雪を題材とし若くは雪に包まれたる複雜なる自然美を表現せる幾多の古名匠の傑作を掲げたのであります。

大正十一年十二月

編者しるす

雪之卷内容目次及畧解

第一圖＝趙仲穆の雪柳群鴛圖

本圖は京都市本派本願寺秘藏の國寶にて絹本着色の淡彩であります。趙仲穆は字にして趙雍と言ひ、文敏の子で董源を師とし、尤も人馬を善くしま

第二圖＝幽汀の寒月梅花圖

本圖は京都市三條知恩寺の秘藏せる石田幽汀筆六曲花卉屏風の一部で、狩野派より四條派を生まんとせる過渡期の作風を偲ぶに遺憾なきものであります。今は京都帝室博物館に寄託されて居ります。（幽汀傳略）

第三圖＝若冲の雪梅雄鷄圖

本圖は京都帝室博物館に出陳せる京都蓮仁寺塔頭兩足院の國寶、若冲筆雪梅雄鷄圖であります。本圖は從來二三の畫帖に掲載されたものであるが、雪の描寫に獨特の技巧を持つ若冲の作品であるが爲めに特に雪の代表作として寶めたものであります。（若冲傳略）

第四圖＝洞雲の雪中小禽圖

本圖は京都府下山科村毘沙門堂門跡の襖繪部分にて狩野洞雲の作と傳ふるもので、雪の晨朝を巧みに描寫せる點に於て洞雲の作物中特筆すべきものであります。（洞雲傳略）

第五圖＝若冲の雪中尾長鳥

本圖は前號に於てしば〳〵掲載せし元京都市相國寺の名幅たりし若冲參拾餘幅の一で、今は宮内省に買上げまなって居るものであります。（若冲傳略）

第六圖＝光琳の寒梅と水仙

本圖は京都百萬遍知恩寺秘藏の尾形光琳筆花鳥十二ヶ月繪卷の一圖にて紙本色づける底紙粉剥落せるものであります。（光琳傳略）

第七圖＝山樂の雪柳双鴛圖

本圖は洛西花園妙心寺塔頭天球院方丈の金碧障壁畫の一部で、山樂の作品中最も名高きことは今改めて云ふまでもありませぬ。（山樂傳略）

第八圖＝元信の雪中宿鳥圖

本圖は洛西花園妙心寺塔頭靈寶院秘藏の元信四十九幅の中にて、國寶に指定され、京都帝室博物館に出陳されて居るものゝ一つであります。殘んの雪渓き池畔に群禽の宿る情趣の豊かなるものであります。（元信傳略）

第九圖＝唐畫の雪林山水圖

本圖は洛北紫野大德寺塔頭孤篷庵より京都帝室博物館に出陳せる筆者不詳の唐畫。夏冬山水圖の双幅中冬の圖であります。

第十圖＝光起の雪中武人圖

本圖は滋賀縣石山寺秘藏の國寶石山緣起の一部で、雪路を辿る武人の詳れを巧に描寫せる光起の作であります。

第十一圖＝同　上

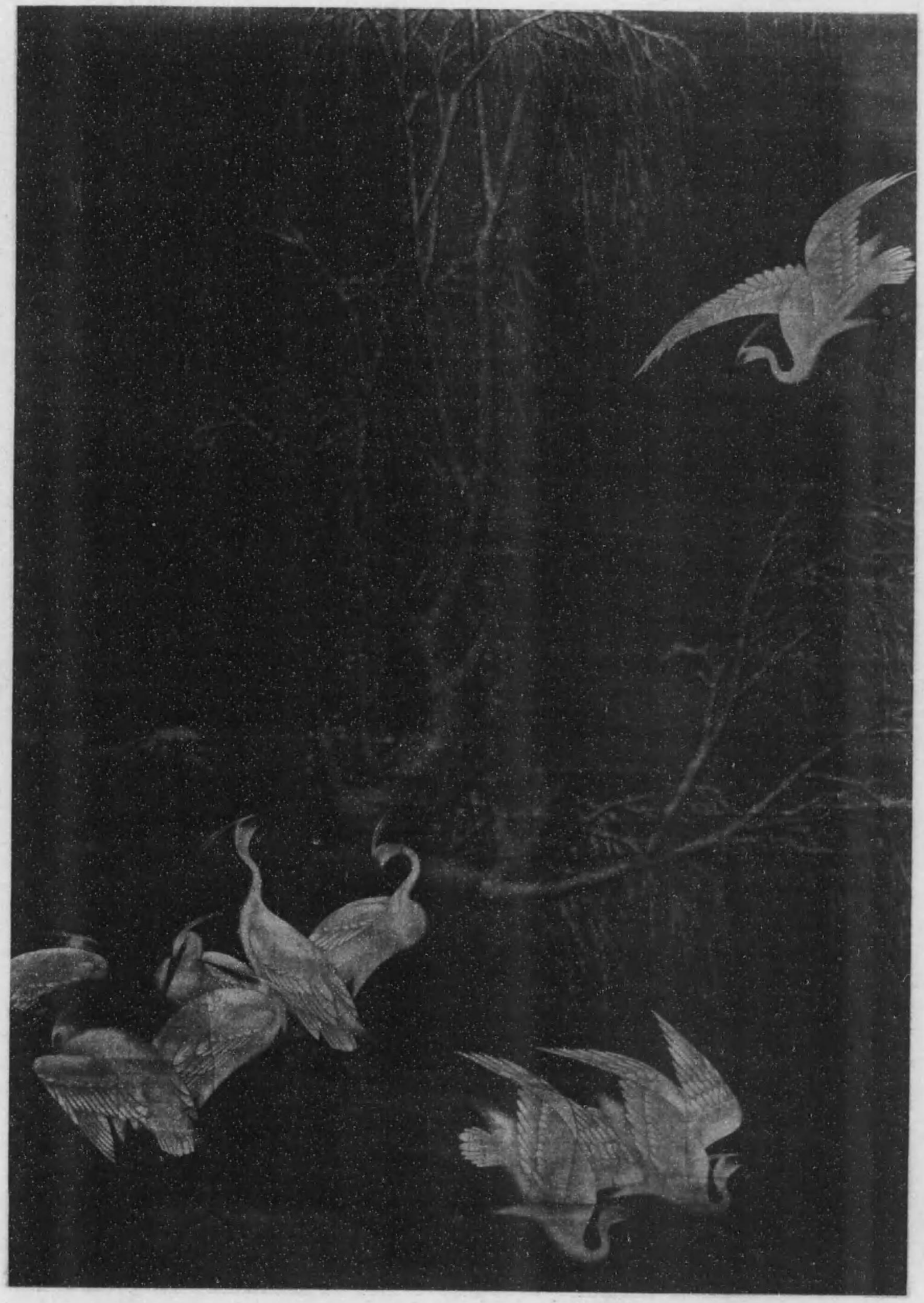
本圖も亦前圖に連續せる畫面の一部で、雪松の描法等特に注意すべきものとして茲に掲げたものであります。本繪卷は目下京都帝室博物館に出陳されて居ます。（光起傳略）

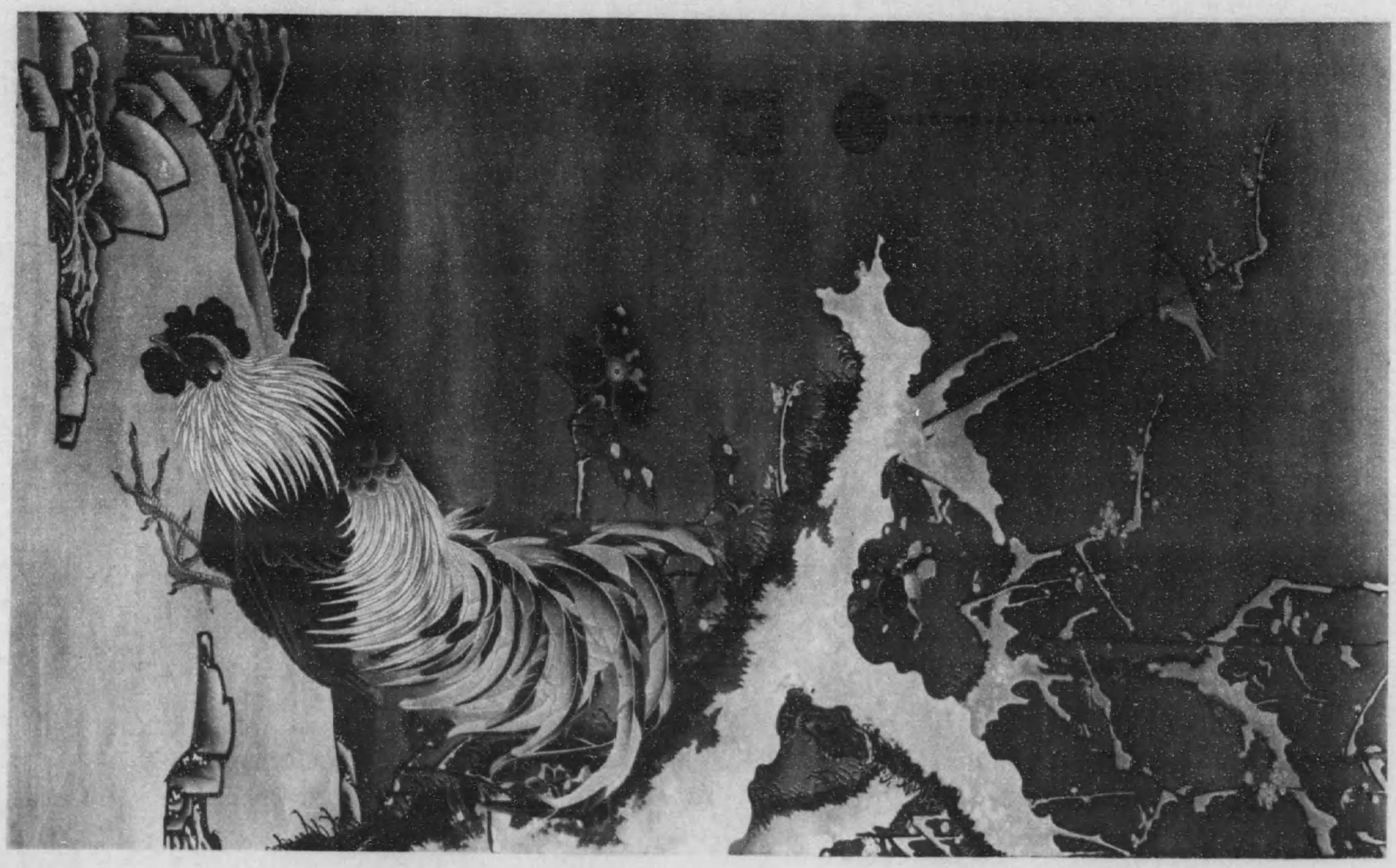
第十二圖＝周之冕の雪中山鳥圖

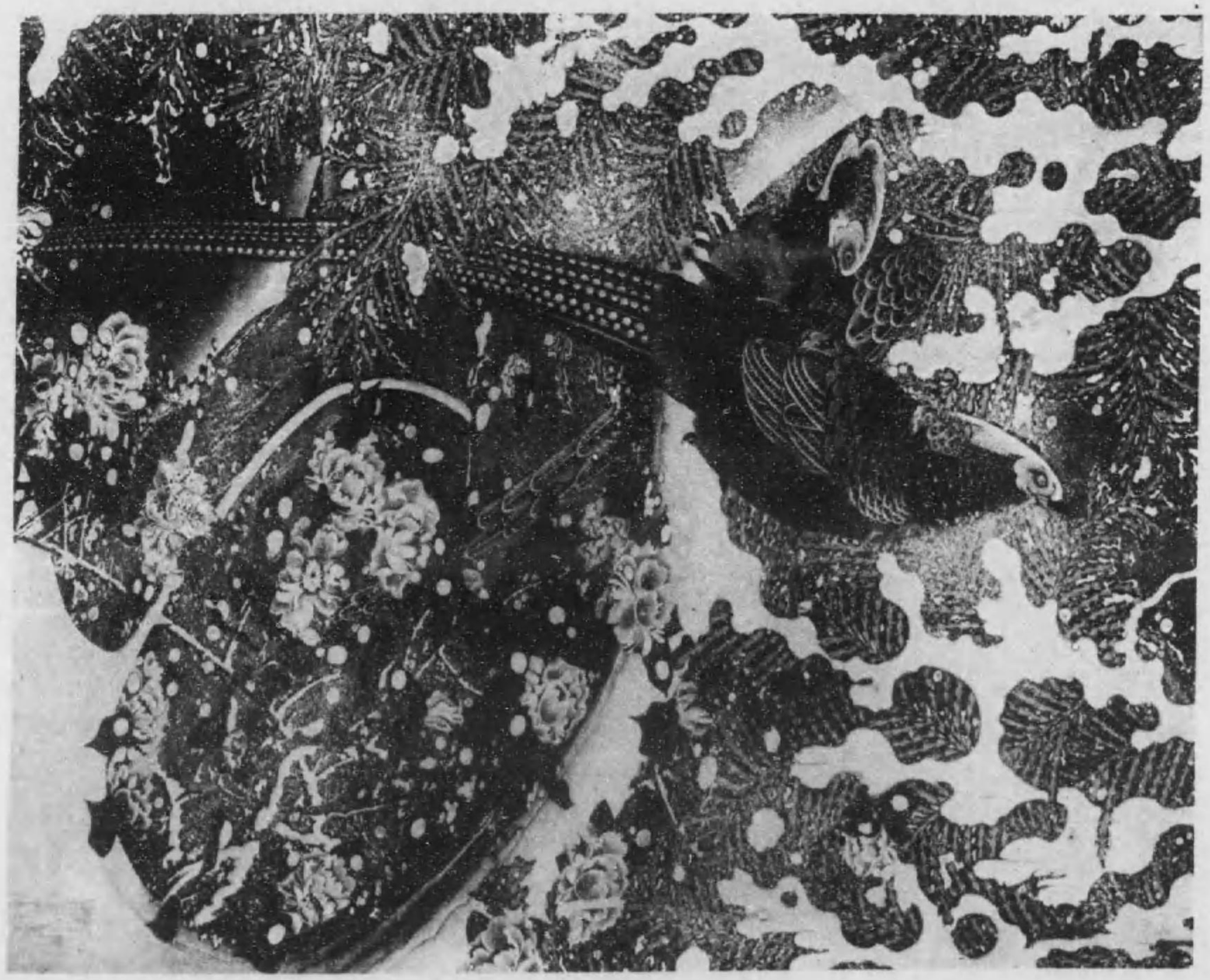
本圖は洛東南禪寺の藏幅にて周之冕の作と傳ふるものであります。周之冕字は服卿、訥庵と號し明時代の人であります、梅竹山林を善くし、又字學に精しかった。

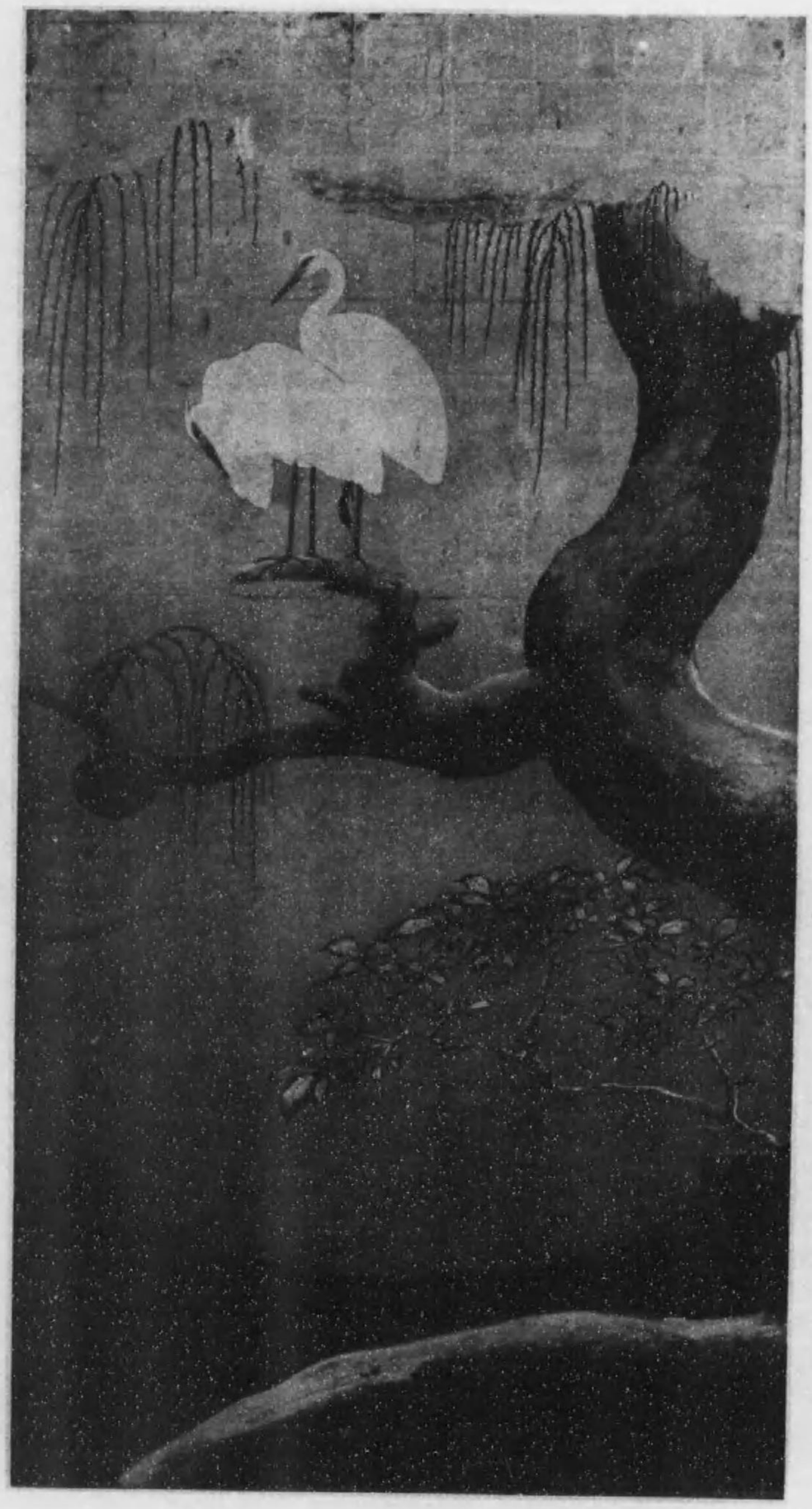
第十三圖＝林良の雪中孔雀圖

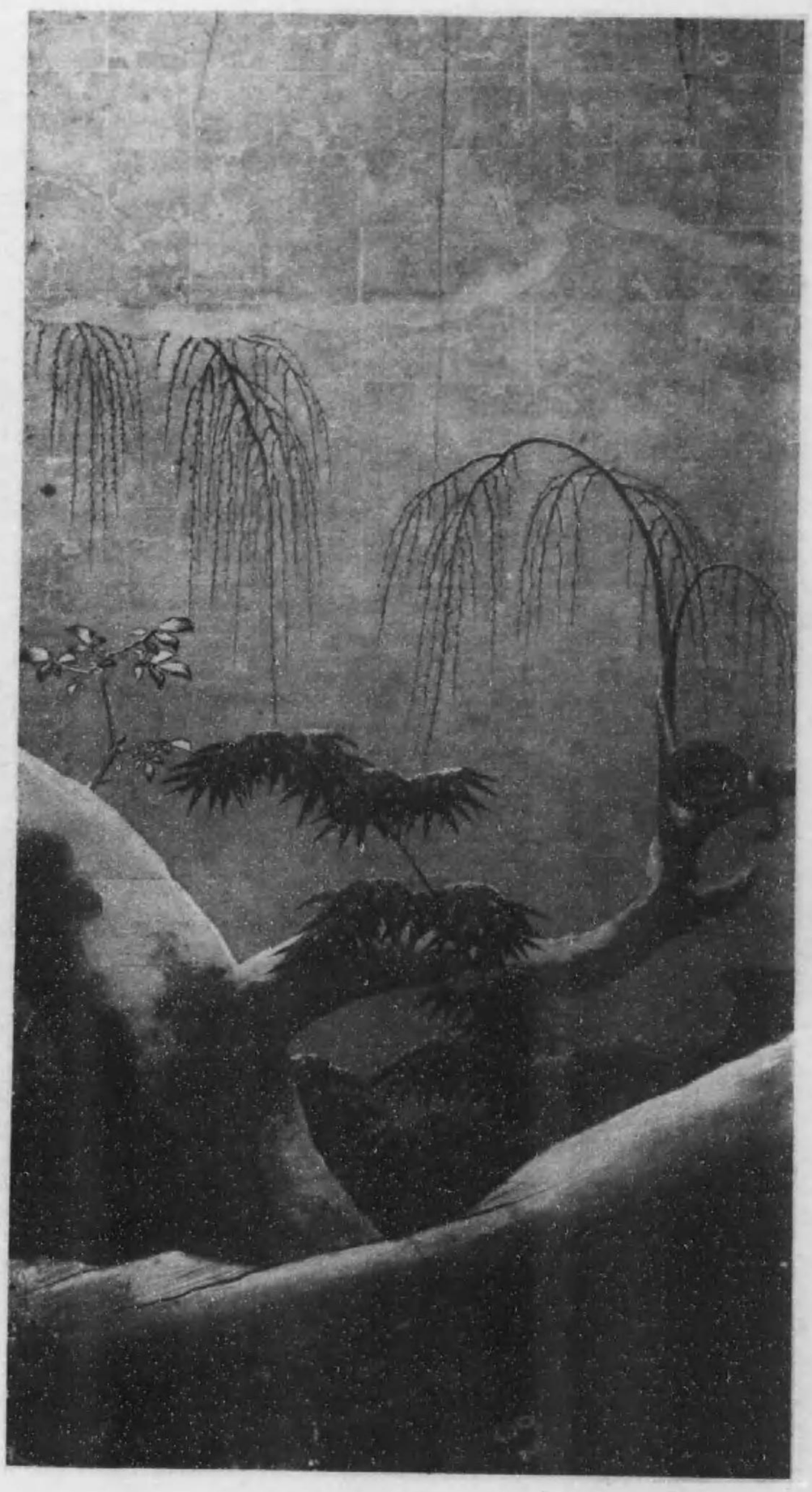
本圖は京都市聖護院所藏の畫幅にて、林良の作と傳ふるものであります。林良字は以善、弘治頃の廣東の人であります。花果翎毛皆着色の妙を盡め其水墨禽鳥樹木の放筆皆遒勁なるものがありました。

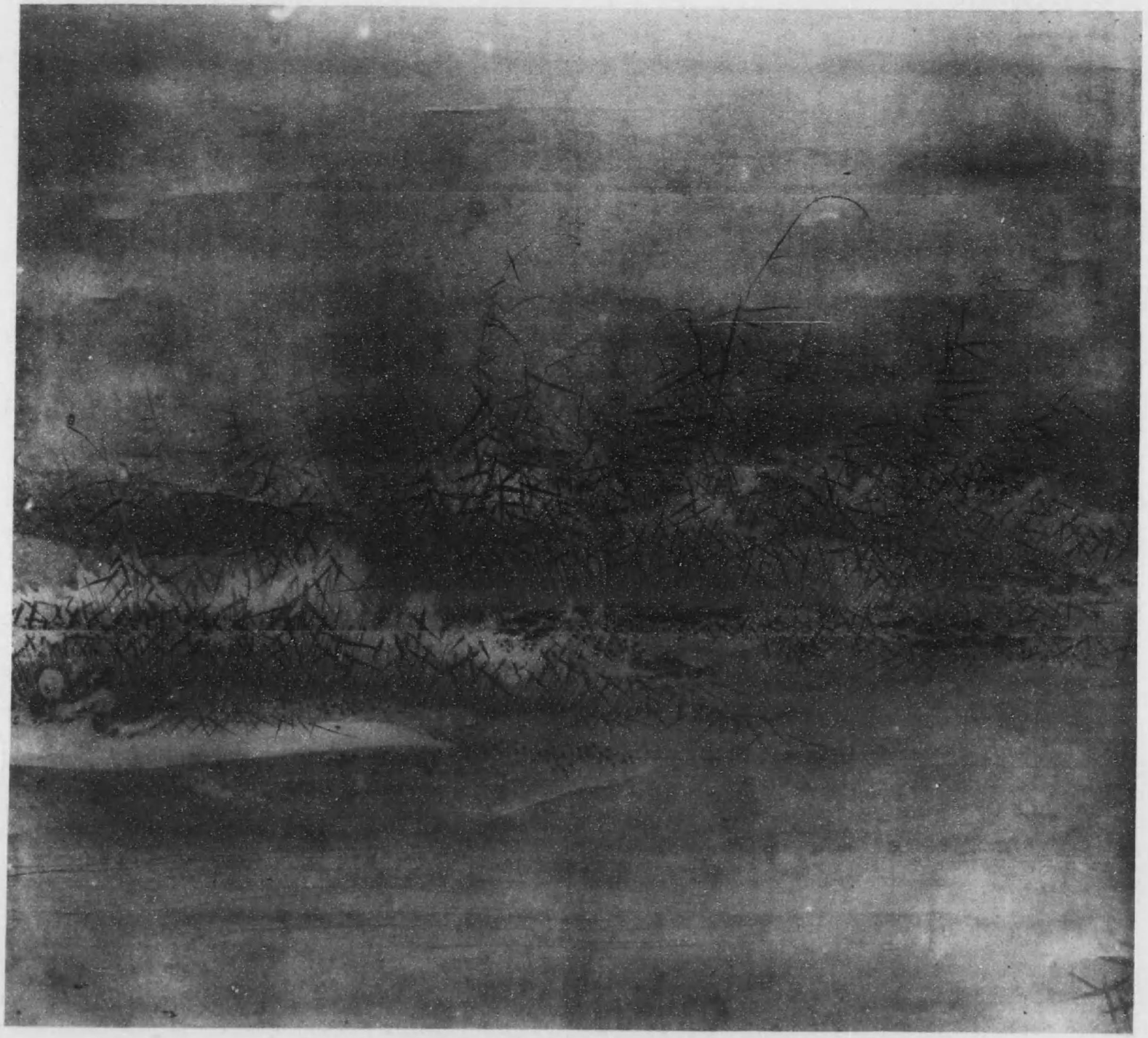


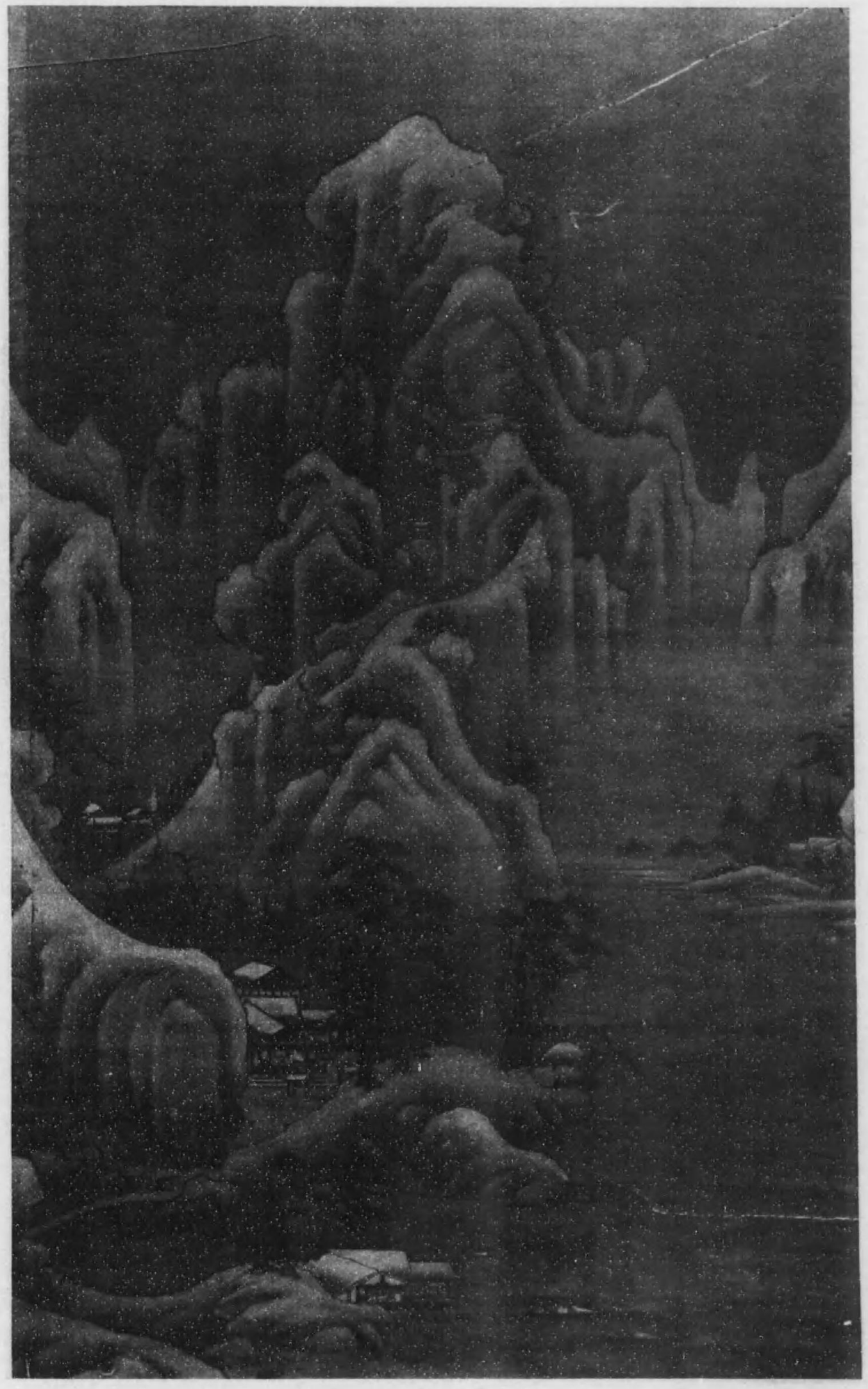


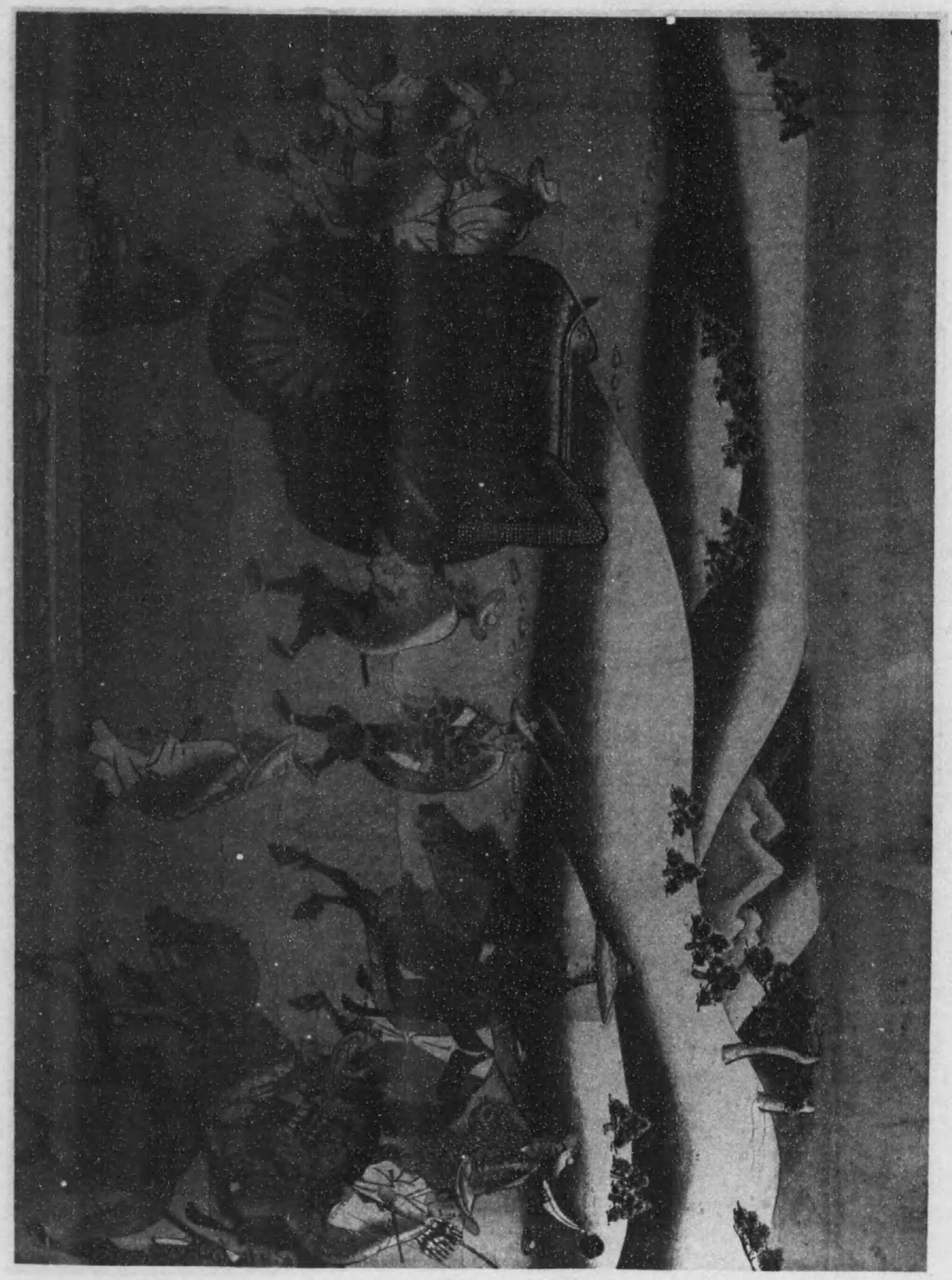


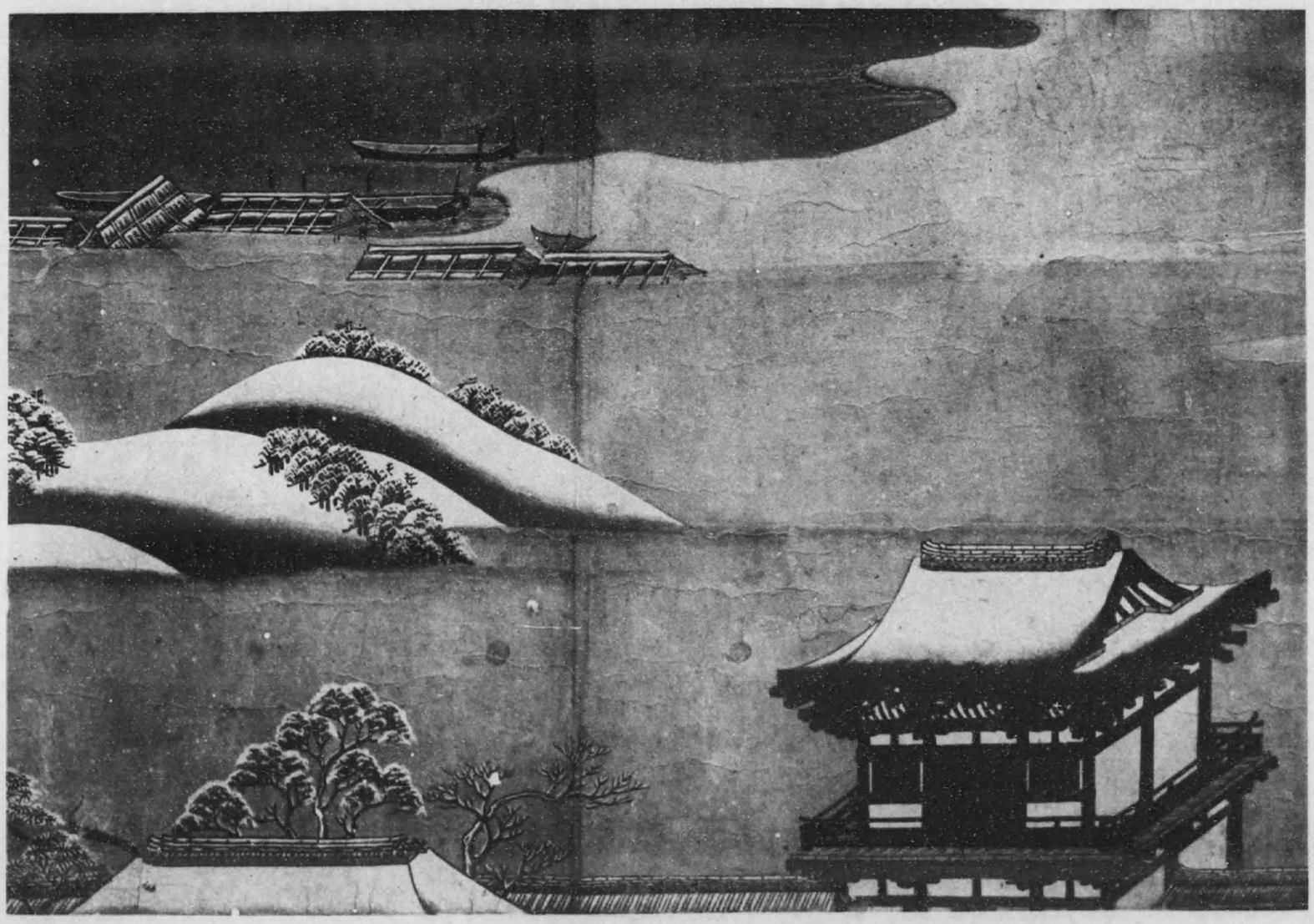












藝林畫譜第十八集尾長鳥之卷編纂について

東洋人は山來獸類よりも鳥類に親しみ、鳥類の中でも殊に尾長鳥を愛好する傾向があります、蓋し鳳凰の如きは鳥の王様であり、獸類に於ける麒麟と等しく端祥の意味で併稱されて居る、其他孔雀、山鳥、雉子、錦鷄鳥等も其尾の房々として長き、其羽毛の優麗艶美なる点に於て藝術家の心をそゝるものあるが爲に作品は各所に光彩を放つて居る、本集は是等の遺作中より撰擇したものであるが他の出版物と重複を避けた關係上必らずしも作家の代表作のみとは云ひ得ない事を豫じめ斷つて置きたい。

大正十二年二月廿日

編者しるす

大正 12. 3. 7 内交

内容目次

第一圖＝應擧の鳳凰

本圖は京都市高倉四條下ル采好爲吉氏愛藏の二枚折にて圓山應擧の作品中最も眞價味の溢れたものである、本圖はもと洛東清水寺の額面たりしものを二枚折に改造したものと傳へられて居る。

第二圖
第三圖＝永俊の孔雀飛翔圖

両圖共京都市聖護院門跡の宸殿金碧襖繪の一部にて筆者は狩野永俊と傳稱され著彩精致艶麗を極めたものである。

第四圖＝永德の山鳥

本圖は洛西嵯峨大覺寺門跡大玄關正面の障壁畫にて狩野永德の筆と認定されて居る。

第五圖＝山樂の雉子

本圖も亦前圖と同樣大覺寺のものにて宸殿牡丹間の襖繪部分である筆者は狩野山樂であり專門家の最も憧憬せるものゝ一つである。

第六圖
第七圖＝狩野派の鳳凰

両圖共洛東南禪寺所藏の桃山六曲屏風扇面張交中の二圖で筆者は不詳なるも永德山樂一派の作品と認めて差支へなきものである。

第八圖
第九圖＝在明の孔雀

両圖共洛東永觀堂禪林寺の金碧襖繪にて筆者は原在明であります、在明は原在中の二男にて字は子德、在明は其雙又寫照と號し當時名手と稱せられたが天保八年十二月廿八日八十八歳にて歿しました。

第十圖＝狩野派の山鳥

本圖は京都市相國寺本山塔頭伏見家の御菩提所たる慈照院所藏の六曲屏風一部にて作風は狩野派なるも筆者は全然不明である。

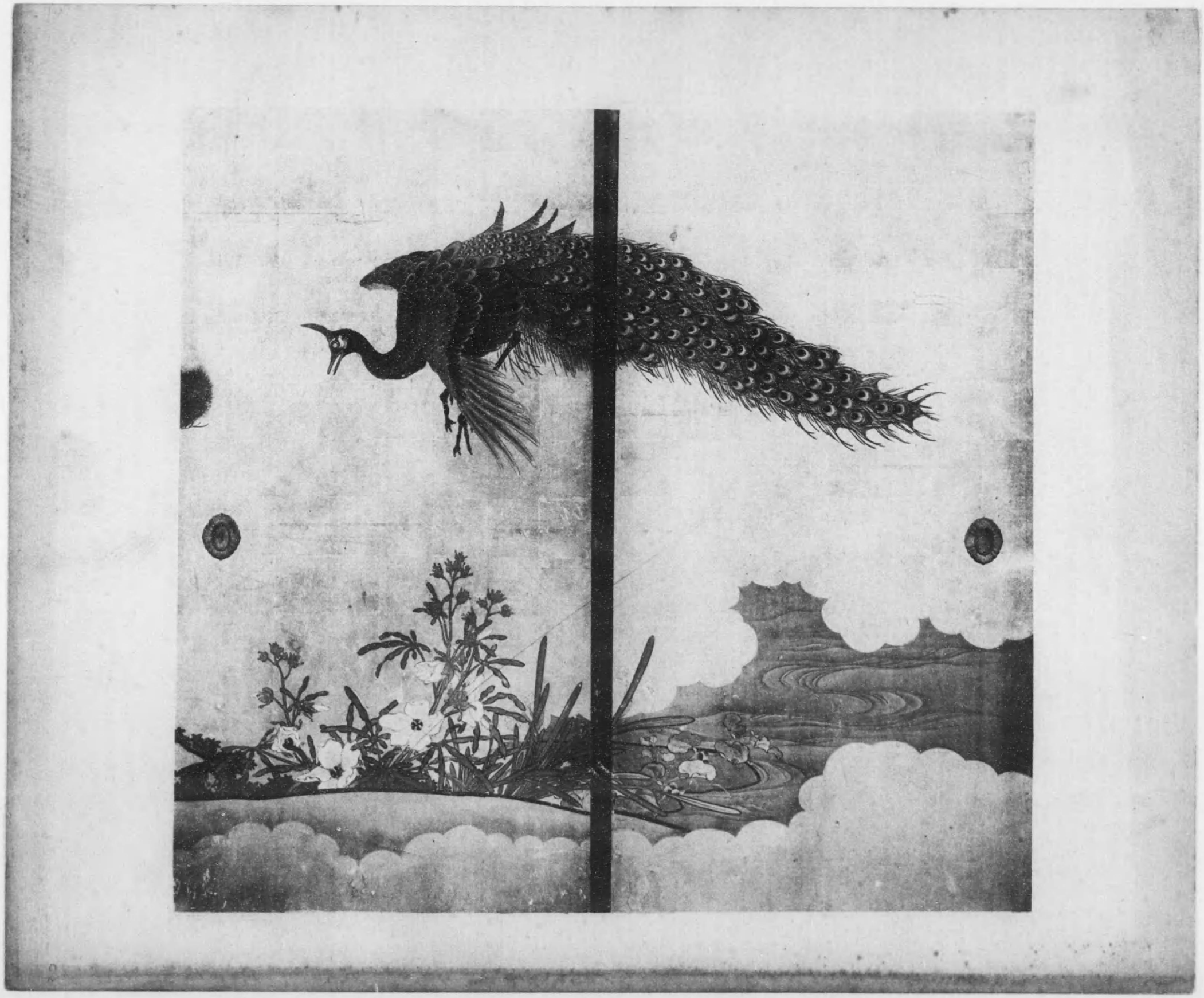
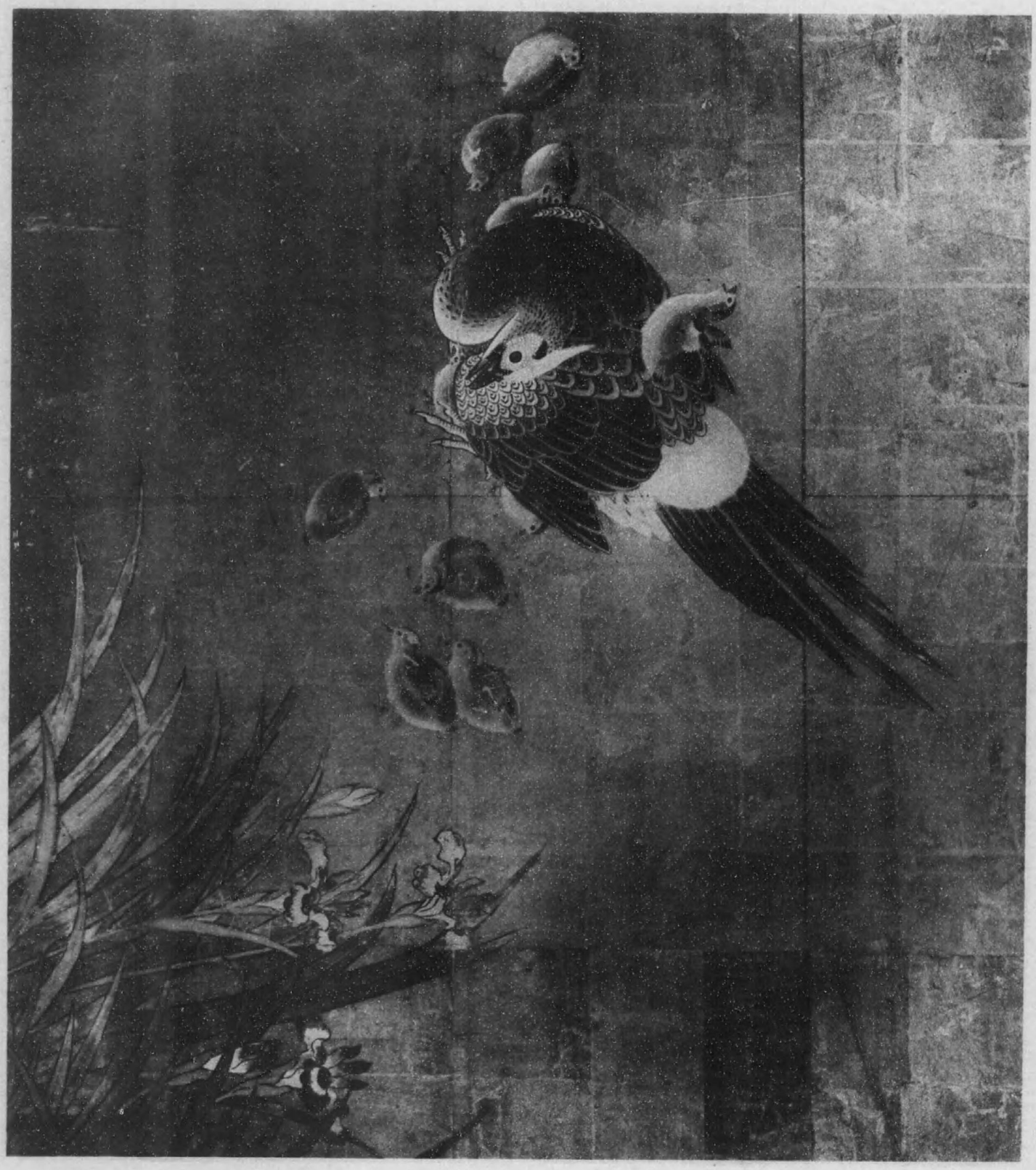
第十一圖＝筆者不詳の雉子

本圖は相國寺塔頭長得院所藏の六曲屏風の一部で筆者不詳となつて居るが圓山派のものと思はれる。

第十二圖＝元信の花鳥

本圖は京都市本能寺秘藏の大幅三幅對の中にて狩野元信の筆である、本圖は從來全く坊間に知られず、同寺の寶庫に秘藏されて居つたものであるが構圖設色共に元信作品中天下一品と云ふも不可なき傑作である。

第十三圖＝堆朱の羽衣模樣

本圖は京都相國寺塔頭慈照院所藏の堆朱香盒の蓋裏で牡丹に羽衣をあしらつたものであります。

以上